大帝国　～ある青年将校の備忘録～

新米士官

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大帝国　～ある青年将校の備忘録～

【Ｎコード】
Ｎ１６２５Ｖ

【作者名】
新米士官

【あらすじ】
ゲーム『大帝国』を原作通りに描きつつ、オリジナルを加えて書いてみました。
視点は第三者視点です。主人公も第三者……の筈。
エロゲーなのでエロは超極力抑えます。
更新は不定期です。

1　始まりの敗北（前書き）

初2次創作作品…でも戦記だから応用は効くか？
更新は不定期です。

1　始まりの敗北

某月某日　北京星域　満州地区

日本帝国海軍第４艦隊　５０式巡洋艦『天龍』艦橋

「敵艦隊補足。間違い無く中帝国艦隊です」

後輩兼砲術参謀副官の新井勇（あらいいさむ）中尉（２３）がコンソールを見ながら報告した。

「連合艦隊旗艦日向の前倉司令長官より東郷先輩に打電。攻撃許可出ました」

通信席でモニターしていた通信・情報参謀の最上彩矢（もがみあや）大尉（２４）が続けて報告。

「本艦の戦闘準備は大丈夫よ」

この『天龍』艦長の本間・シャルロット（ほんま・シャルロット）少佐（２４）が急かす様に言った。

「さて、始めても良い頃合いだな。相棒」

相棒兼砲術参謀の木村正俊（きむらまさとし）中佐（２４）が促す様に呟く。

「……だな。東郷先輩達も動いた様だし…指揮下の戦隊全艦に連絡、我らが先陣を切って突入せよ！」

そして、この話の主人公を勤める事と成った宮澤清志（みやざわきよし）大佐（２４）の声が艦橋に響いた。

さて、この世界を少しばかり説明しよう。
今は統一宇宙暦９３９年。
複数の国家があり、国家は一星域・複数の星域を統治し、星域間の移動はワープゲートを通じ移動する。
ワープゲートでは艦船のワープ機関に特定の数値を入力・起動し、他星域へと移動する。
この新たな星域を探すのは各国ともに躍起になっている。
ちなみに代表的な国はエイリス帝国、ガメリカ、ドクツ、イタリン、オフランス、ソビエト、中帝国、そして、日本帝国であった。

２０分後……

宮澤
「……おかしい」

木村
「何が？」

宮澤
「中帝国艦隊が脆すぎる。数も少ない…奴らの得意技は数で押し込む事だ…なのに脆い」

戦闘状況を見ていた宮澤は疑念を口にした。

木村
「……確かに脆いな。不気味なくらいに」

本間
「そう？　一番主砲、三時の方向！　二番主砲は十一時方向の駆逐艦！　てぇー！！」

ビシュン！　ビシュン！

ドガーン！　ゴワーン！

新井
「本間先輩の撃破数は１２隻目…と」

ビーム砲が閃き、敵駆逐艦を打ち砕く。
正に行け行けドンドンの様に順調だ。

宮澤
（…怪しいな。東郷先輩か秋山先輩に具申を…）

最上

「旗艦日向以下本隊がぜ…」

キラッ！

ドドーン！！ドドーン！！ドドーン！！ドドーン！！

全員

「「「「「！！！！！」」」」」

閃光と爆発音に艦橋にいた全員が振り向くと先程まで健在だった筈の本隊の艦艇が次々と撃破・爆散していた。

新井

「そんな！　後方に敵艦隊なんていませんよ！！」

最上

「…違います！　裏切りです！　本隊後方の樋口・末山提督以下数名が裏切りました！　旗艦日向より通信途絶！！」

新井

「先輩！　ここは反転し売国奴共を成敗…」

木村

「それは無理だ。後方より敵艦隊の増援。現段階で４個艦隊規模。未だに増えてる…戦司（戦隊司令）、どうする？」

木村の癖で、重要的な決断を促す時は役職名か階級名で呼ぶ。普段は相棒か名前で呼ぶのだが。

宮澤

「…最上、東郷艦隊司令から通達は？」

最上
「秋山参謀から全艦撤退命令が入ってる。それだけね」

宮澤
「決定だ。戦隊全艦に命令。全周警戒しつつ離脱。シャル、艦は任せた」

本間
「了解」

新井
「先輩……」

宮澤
「新井。お前の気持ちも解らんでは無いが、どう足掻いても敗けは敗けだ。第一、ここで死んでは帝（みかど）や国民を誰が護る？」

新井
「……わかりました」

宮澤
「我慢するのも勝つ為の手段だ…何時か機会は巡ってくるさ」

そう呟きながら拳を握り締めた…この敗北、決して忘れはしない…と誓いながら……。

『……旧世代艦の多い第４艦隊で、ようやく我が戦隊旗艦を新しくした後での初戦の敗北は嫌なものだった。しかし、上官兼先輩の東郷毅中将の下心（？）と適切な判断により第４艦隊は無事に撤退出来た。だが、主力艦隊の艦艇は僅かな艦艇が何とか戻って来たぐらいであった。さて……この先どうなるか……まあ、成るようにしか成らないよな。　宮澤清志　備忘録に記す』

次号へ

1　始まりの敗北（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

2　我が寝床（前書き）

2話目を更新いたします。

2　我が寝床

1週間後……日本帝国軍士官宿舎内

宮澤
「はぁ……報告って言ったって何を報告すればいいんだよ」

宿舎の廊下をぶつぶつ言いながら宮澤は自分の部屋へと向かっていた。
あの敗戦から1週間、その間は天龍や戦隊所属艦艇の調整や艦隊編成の改変などで缶詰めにされ、漸く出られたら、今度は報告書を出せである……ついこの間、身内から裏切り者が出たのによく報告書を書け…とは暢気な話だ。

宮澤
（まあ、秋山先輩達はもっと大変だろうな…ベテランの殆どが前回の戦いで死んだとなれば……って結局、こっちにも回ってくる事だし）

胃を痛めているであろう東郷毅先輩の参謀、秋山敬一郎（あきやまけいいちろう）少将（兼先輩）の顔を思い浮かべたが、直ぐに現実に引き戻された。

宮澤
「……止めだ、止め。これ以上考えたって上が決まらないと意味が無いや」

空席の連合艦隊司令長官兼海軍長官を決めないと何にも成らないし……

宮澤の部屋

宮澤
「ただいま…」

「お帰りなさい！！！！」

ガバッ！

部屋に入った瞬間、抱き付かれる宮澤。
金髪のウェーブ、外国人らしい顔立ち……。

宮澤
「ごめんね、マーリン。心配かけたね」

彼女はマーリン。エイリス帝国の中心、ロンドン星域のエイリス帝国貴族家出身のお嬢様……の筈なのだが、何故か日本の士官宿舎に『同棲』している。
実はマーリン、エイリス帝国の戸籍上では死んでいる事に成っている。
何故か？……4年前に彼女と彼女の両親は『マレーの虎』に家族旅行へ来ていた時、祖国解放同盟『ボルネオ』の爆弾テロに巻き込まれて死亡した事になっているからだ。
だが、このテロは嘘ぱっちであり、実態は腐敗を続けるエイリス帝国貴族の中で高貴克つ人道主義者であったマーリンの両親を疎まし

く思った腐敗貴族達が爆弾テロに見せ掛けて暗殺しただけだ。
しかし、偶々難を逃れたマーリンは追っ手を恐れて日本星域行きの貨物船に密航し、到着後、貨物船から急いで逃げ、とにかく姿を隠している内に騒ぎ疲れて屍と化した同期生達を引き取った帰りに近道の裏路地を通っていた宮澤に拾われ、おんぶされて部屋まで来たのである。
無論、密航・逃亡生活で服はボロボロ、髪はボサボサ、足は裸足、身体中垢だらけと言う状況で、取り敢えず風呂に放り込み、適当なサイズの私服を揃え、ごはんと目玉焼き2個とトースト数枚を用意したら……あっさりと平らげた。
落ち着いてから上記の事情を聞くと半信半疑（今から思えばバカらしいがスパイかもしれないと多少疑ったから）であった宮澤は外務省に居る友人に調べてもらい、克つ彼女の行動を見張ってみたが、1週間程で余り動きがないのと、事実確認が取れた事……見付けた場所が裏路地と言うのも解せない点だったのもある……から、一段落すると直ぐ近くに住む東郷毅先輩の亡き奥さん、スカーレット夫人に相談、そんなこんなで今の同棲生活に至っていた。

マーリン
「…そこまで現状は酷いの？」

宮澤
「残念ながら…と言うべきだね。まあ、まさか裏切りで第一艦隊は全滅に近い壊滅。特にベテランが死に過ぎた」

マーリンお手製の肉じゃがに舌鼓を打ちながら喋っていた。

マーリン

「大丈夫なの？　聞いてるだけだと背水の陣なんだけど…」

宮澤
「まあ、俺ら下の人間は戦うだけさ。それに中帝国のシュウ皇帝は只の我が儘なガキだからな…」

そこまで言って視線をマーリンに向けると、物凄く悲しそうな顔をしていた。

宮澤
「あ、いや……済まない」

マーリン
「ううん…だって、それがあなたの…」

ドンドンドン！！

新井
「先輩！　ビックニュースです！　開けて下さい！！」

宮澤
「新井か？　開いているぞ」

新井
「あ、本当だ。失礼します！！」

蹴破らんばかりに入って来た新井は走って来たのか、息絶え絶えだった。

宮澤

「マーリー、済まないけど、水とお箸とお茶碗と肉じゃがのお代わりお願い」

マーリン
「はいはい」

返事と共に一度台所へ行ったマーリンが水の入ったコップを持って戻って来た。

マーリン
「はい、どうぞ」

新井
「あ、ありがとうございます～」

一気に水を飲み干した新井は一息吐いた。

宮澤
「で、何がビックニュースなんだ？　晩飯食いながらでも話そう」

新井
「あ、はい…で、ニュースの事ですが、新しい海軍長官が決まりまして…」

宮澤
「お、決まったか。で、誰なんだ？」

新井
「はい、東郷先輩です！」

宮澤
「……東郷先輩って、東郷毅先輩の事か！？」

新井
「それ以外の誰がいるんですか！？」

宮澤
「いや……果たして、大丈夫なのかな……」

色んな意味で心配な宮澤であった。

次号へ

2　我が寝床（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

3　新生海軍の出陣（前書き）

ゲームキャラの大集合です。
微妙にオリジナル展開が入ってます。

3　新生海軍の出陣

3週間後……海軍司令部

晴れて海軍長官と成った東郷毅先輩は朝から初の御前会議に主席している。

しかし……心配に成って昨夜、東郷先輩の部屋に行ってみたが、もぬけの殻……居たのは先輩とスカーレット夫人の間に出来た幼い娘の真希ちゃんが居ただけ。

お父さんの居場所を訊くとデートに行ったそうで、ケータイのリストを出すとデート相手を知っていたので、直ぐに秋山先輩へメールで知らせ、マーリンと共に真希ちゃんを預かっていた。

宮澤

「さて……司令部に出頭ってなんだろう？」

秋山先輩からお礼のメールと共に司令部への出頭命令が出ていた……なしてだ？

宮澤

「……まあ、いいか」

雑念を振り払い、司令部に入った。

「おやおや、あんたも東郷の旦那に呼ばれたのかい？」

司令部に入った瞬間、明らかに歳上の女性に声を掛けられた。

その女性の顔は宮澤も軍の広報で幾度か見た事のある顔だった。

宮澤
「えーと、南雲圭子（ナグモケイコ）さんですか？」

南雲
「お、私を知ってるのかい？」

宮澤
「えぇ、何度か軍の広報で拝見しました」

南雲
「そうかいそうかい、私も有名になったね～」

「お、また坊主が来たのか。どうだ、一勝負しねえか？」

こちらを向きながら賽子を放り投げながら訊く老人。
山本無限（やまもとむげん）提督、72歳の高齢で引退していた筈だが、前回の敗戦で再び現場復帰したのだろう。

「無理しないで下さいね。山本さん」

山本
「あぁ、わかってるよ。お嬢ちゃん」

「もう…山本さんの専属看護婦の古賀（こが）ひとみです」

宮澤
「あ、これはどうも」
なるほど…復帰の条件はこれか…山本さんか東郷先輩のどっちが出したかは知りませんが。

「おい、ごらぁ」
今度は木刀片手にいかにも口も態度も悪そうなヤンキーが現れた。

「俺は田中雷蔵（らいぞう）。お前が誰だかは知らねえが、俺は連合艦隊司令長官に昇り詰める男だ。邪魔したら容赦はしねえ」

宮澤
「（成る程、海軍一の暴れん坊の話は嘘じゃあないか…軍規も上官も無視とはね…）わかった。別に連合艦隊司令長官に興味は無いし、邪魔もしない。これでいいか？」

田中
「…あぁ、それでいいぜ」
何故か『意外だ』と言いたそうな顔をしている。
まあ、実際、司令長官の椅子なんて目指して無いし。

「ジイィィィ……」
……あぁ～、なんかヤバい女（ひと）が居る…。

しかし……どこかで見た事のある顔……

「…私になにか？」

宮澤

「うお！？」

何時の間にやら目の前に顔が来ていた。

しかし、漸く思い出す事が出来た。

「小澤祀梨（おざわまつり）です。どうぞ、よろしく」

宮澤

「よ、よろしく…」

確か最上が彼女の事を話ってたっけ…ＢＬ好きの腐女子だって…ちなみに最上はＧＬ好きのお姉さん（最上自称）で、対立関係だとかかんとか…。

宮澤

（しかし……見る限り新生海軍の構成提督だろうけど……何で俺も呼ばれたんだろ？）

問題はそこ……別段変な事はしてないのに……。

３０分後……

御前会議を終えた東郷長官と秋山参謀長が司令室に入って来た。
そして、上記５人（古賀さんを入れたら６人）の挨拶が終わった。

東郷
「さて、早速で悪いが、北京星域攻略戦の段取りを決める」

……え？
ちょ、ちょっと待ってな！？

宮澤
「あ、あの、東郷先輩？」

東郷
「ん、なんだ、宮澤？　今さらお前の紹介は要らないだろう？」

宮澤
「い、いえ、そうでは無くて…何で自分はここに呼ばれたのかで有りますか？」

東郷
「うん？　通知を読んで無いのか？」

宮澤
「通知？　何の通知ですか？」

ここで漸くおかしいと感じた東郷先輩は秋山先輩を見た。
秋山先輩も慌ててケータイで担当者に電話確認している。

秋山

「…すみません、昨今の激しい人事異動で通知が送付されていなかった様です」

東郷
「そうか…じゃあ、ここで言おう。宮澤清志大佐は少将に昇進、第４艦隊提督とする。以上だ」

……え？
ショウショウにショウシン、ダイ４カンタイテイトクとする？
これを頭の中で毎秒１０回も繰り返す内に漸く理解する。

宮澤
「……秋山先輩…いくら何でも…」

秋山
「…知っての通り、我が軍は提督不足、人材不足。使える人間は提督にするしかない」

宮澤
「いや…ですが…」

東郷
「古巣の第４艦隊を預けられるのはお前しかいない。旗艦は俺の乗る長門の二番艦陸奥。天龍以下戦隊艦艇は残留している。問題は無いな？」

宮澤
「……わかりました。お受け致します」

東郷

「よし、では北京星域攻略戦に戻る。1ヶ月も期間が空いたが、敵の侵攻も予想される。そこで先手を打って北京星域を攻略する」

なるほど、確かに合理的な話だ。
敵が繰り出して来る前に出鼻を叩くのは理にかなっている。

宮澤
「それで、いつ出撃しますか？」

東郷
「今だ」

宮澤
「……へぇ？」

今…いま…イマ…イマ……今！？

東郷
「今から30分後に全艦隊は北京星域に向かって出撃する。解散」

全員
「「「「了解！」」」」

東郷先輩と秋山先輩が出た後、集まっていた南雲提督達も自分の艦隊が待機するドックへと向かって行った。

宮澤
「まったく！　どうなってんだよ！？」

第４艦隊が待機するドックに向かって全速力で駆ける宮澤。
司令部から艦船ドックは目と鼻の先だから、良いものの、ゆっくりとはしていられない。
そうこうしている内にドックに到着。

宮澤
「あ、おい！　陸奥は何処にいる！？」

工員
「は、第一ドックに…」

宮澤
「ありがとう！！」

そこからは更にスピードを上げ、一気に艦橋まで駆け上がった。

宮澤
「すまん！！　着任が遅れた！」

新井
「……先輩？」

木村
「……宮澤、なんでお前がここに居るんだ？」

宮澤
「…木村、新井……どうしてここに？」

本間

「私は陸奥艦長に成ったから居るんだけど…なんで？」

最上
「まさか…新任の第４艦隊司令って…」

宮澤
「本間に…最上…じゃあ、お前らが司令部か！？」

木村
「こりゃあ驚いた！　戦隊メンバーが集まるとはな！」

新井
「あぁ、陸奥への移動通知が来た時、どれ程不安だったか！　本当に嬉しいです！！」

本間
「そうよ！　なんで教えてくれなかったの！？」

宮澤
「すまない、その話は後にしよう…最上、長門から通達は？」

最上
「いいえ。ただ、秋山参謀長からは何時でも出撃出来る様に準備しておけって言う事前通達だけね」

宮澤
「そうか…よし、第４艦隊はこれより他の艦隊と共に北京星域へ出撃する…先の戦いのリベンジだ！」

木村

「そうきたか…良いぜ、やってやろうじゃん！」

新井
「もちろんです！　売国奴共を見逃したままには出来ません！」

本間
「陸奥の準備は完了してる。何時でもどうぞ」

最上
「艦隊全艦も同様よ」

宮澤
「うん…全艦発進せよ！！」

全員
「「「「了解！！」」」」

返事と共に動き始める仲間達。

新井
「あ、先輩。マーリンさんに連絡しなくていいんですか？」

宮澤
「え、あ、そうか……だがな……」

木村
「いいんじゃねえの？　今の内にしとけって」

宮澤
「あ、あぁ…そうする」

直ぐにケータイを取り出し、艦橋の隅に行くと部屋の番号を選択する。

マーリン
『はい、マーリンです』

宮澤
「あ、マーリー…ごめん、急な出撃で今晩は帰れそうに無いんだ……本当にすまない」

マーリン
『…そうだと思いました…無事に帰って来る事を祈ってます』

宮澤
「あ、うん……今度、外へ食べに行くか？」

マーリン
『う～ん……そうね。行くところは帰って決めようね』

宮澤
「あぁ…じゃあ」

ケータイを切ってから気が付いた……艦橋に居る全員がこっちを見ている事に……。

宮澤
「……お前ら！！！　仕事をせんか！！！！」

……陸奥の艦橋に宮澤の絶叫が響いた。

次号へ

3　新生海軍の出陣（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

4　北京攻略戦（前書き）

先ずはゲーム通りの設定で戦闘と成ります。

4　北京攻略戦

日本のワープゲート手前

陸奥艦橋

宮澤
「…と言う訳で、第４艦隊は急遽北京星域攻略に出撃する事になった」

木村
「人事部が原因で通知書が届いて無いって…なんだよそれ？」

新井
「まあまあ、こうして皆が再び集まった訳ですから。いいじゃありませんか」

最上
「ちっ、祀梨の腐れ女が提督になるなんて」

本間
「最上さん、司令部の決定ですらか仕方ありませんよ？」

最上
「わかってるわよ…キイィィィ！！」

木村
「駄目だこりゃ」

オペレーター
「提督。ワープゲートに入ります」
宮澤
「そうか…さて、いよいよか」
宮澤が決意を固めた瞬間、第４艦隊はワープした。

その頃……中帝国北京　宮殿

玉座には少女の様な少年皇帝が座っていた。
シュウ皇帝……現皇帝だがその容姿とは反対に性格は激烈に悪く、幼くして即位し、乗っ取りを狙うガメリカ・ソビエトの甘言に乗せられて愚かな暴君に育ってしまっていた。

シュウ皇帝
「……飽きた」

そう言って杯を床へ放り投げる。
本当に暴君ですね。

シュウ皇帝
「おい、小日本の帝はまだ連れて来られんのか！？」
近くに居る中帝国軍提督のリンファとランファに怒鳴る。
リンファ

「はぁ、現在戦力を集結させ、日本侵攻の準備をしています」

シュウ皇帝
「ふん、早くしろ！　早くせんと…どうなるか解るな？」

いつの間に抜いたのか青竜刀を見せるシュウ皇帝。
つまり、マジで首を斬るって事。

兵士
「陛下！　大変です、陛下！！」

シュウ皇帝
「どうした？　小日本が降伏して来たか？」

兵士
「その反対でございます！　日本艦隊の侵攻して来ました！！」

シュウ皇帝
「なに！？　くそ、舐めた真似を…なにをしている！？　早く迎撃せんか！！」

リンファとランファに罵声を浴びせる。

ランファ
「ねえ、リンファ。撃退出来ると思う？」

リンファ
「……無理だと思う」

何故かお互い心中で溜め息を吐いていた。

北京星域　満州地区

宮澤
「満州よ、我々は帰って来たぞ」

木村
「おいおい、セリフをパクるな」

宮澤
「すまんすまん」

そう言うと再び窓の外に視線を向けた。
そして、直立不動で敬礼。

宮澤
（英霊達よ、安らかに…）

ビービービー！！

新井
「敵艦隊接近！　規模は７個艦隊！」

宮澤
「他はどうだ？」

新井

「はい、えーと……近くに中帝国軍の輸送船団がいます」

最上
「長門より伝達。山本艦隊に輸送船団攻撃命令出ました。残りは我に続け」

宮澤
「うん。では、第４艦隊はこのまま長門に続け」

新井
「了解」

山本艦隊が輸送船団攻撃の為、離れるのを横目に見ながら、宮澤は敵艦隊に集中した。

新井
「先輩！　敵艦隊内に我が軍の艦艇を捕捉！」

木村
「裏切り者まで防衛戦に投入か…どうする？」

宮澤
「降伏するならいざ知らず、敵でいる以上は叩き潰すまでだ」

そうこうしている内に……

新井
「敵艦隊、射程内に入りました！」

最上

「長門より攻撃命令発令！」

宮澤
「よし、全艦全砲門開け！　てぇー！！」

ズビューン！ズビューン！

今まで聞いた中でも図太い戦艦の主砲発射音だった。
そして、その威力は強力だった。
野太いビームは中帝国軍の駆逐艦を2隻を貫いた後、これまた中帝国軍の巡洋艦に命中・轟沈した。

木村
「わお…さすが戦艦。威力が半端無いぜ」

新井
「中帝国軍の艦艇だから更に強力でしょうね」

中帝国軍艦艇のオンボロさは有名だからな…。

新井
「先輩、田中艦隊が突撃します！」

宮澤
「暴れん坊は自分を抑えると言うのを知らないのかな？」

最上
「無理でしょう。あの暴走ヤンキーは」

宮澤

「では、こちらも動こう。最上、長門に連絡、我これより、独自行動を取る。本間、右舷に大回りするんだ。新井、艦隊全艦に我に続け」

3人

「「「「了解！」」」」

中帝国艦隊は数で押すため、艦隊を縦列の様に展開していた。
しかし、これは反対に横っ腹を突かれると脆い事を示す。
また、7個艦隊と言う艦船の密度は余りにも濃いものだった。

新井

「敵艦隊の真横に付けました！」

宮澤

「よーし…敵の横っ腹を食い破れ！　全艦左舷全力砲戦！　てぇー！！」

本間

「陸奥の全砲門、てぇー！！」

ズビューン！ズビューン！ズビューン！ズビューン！

いきなりの真横からの攻撃に中帝国艦隊は面白い様に被弾・撃沈していく。
また、避ける為に転舵した艦船同士が衝突する二次被害も生み出した。

木村

「山本艦隊、護衛を片付けて輸送船団を降伏させた様だ。こっちに

接近中」

最上
「山本艦隊旗艦『五十鈴』より通信、スクリーンに繋ぎます」

スクリーンに映し出されたのは皺のある独特な顔の山本無限提督と看護婦の古賀さん。

山本
『ほう、坊主だが中々やるじゃねえか。ここは俺らに任せて敵の後ろを突いてみろ』

宮澤
「はい、お願いします。本間！　新井！　敵艦隊後方に転進！」

山本
『後で一勝負するのが楽しみだな』

古賀
『山本さん！！』

山本
『と、嬢ちゃんが騒ぎそうだな』

そして、通信がきれた。

木村
「…最後のはなんだったんだ？」

宮澤

「さぁ？」

配置を入れ換わり、敵艦隊の後ろに周りこんだ時は既に敵艦隊は４個艦隊規模に減っていた。

本間
「随分減ったわね。しかも、まだ混乱してる」

宮澤
「更に混乱させてやる。背後を取った、撃て！」

第４艦隊が背後から攻撃を仕掛けた為、更に混乱が広がり、敵艦隊の被害も増えていく。

新井
「先輩！　前方１１時方向に敵旗艦戦隊を捕捉！！」

宮澤
「なに？　艦種は！？」

新井
「艦景からソビエトの旧型ミサイル巡洋艦複数！　あとは中帝国軍の戦艦です！」

宮澤
「よし。これより旗艦は敵旗艦戦隊に攻撃を掛ける。本間、操艦と砲撃を任せた！」

本間
「わかった！　後部主砲は引き続き敵艦隊！　前部主砲は敵旗艦戦

隊！　てぇー！！」

その頃……旗艦のリンファ艦（旧型ミサイル巡洋艦）

オペレーター
「ダメです！　前と左から攻撃を受けていて、艦隊の指揮系統が大混乱に陥っています！！」

リンファ
「うぅぅ……」

オペレーターの声にリンファは共有主義を記した『赤本』を更にキツく抱き寄せるしか無かった。
いくら中帝国軍の士官学校を好成績で卒業し、ソビエトのスパイ、ゾルゲから支援を受けていても、ここまで戦況が悪くてはどうする事も出来ない。

オペレーター
「あぁ！　我が戦隊後方に敵艦隊！　戦艦1、巡洋艦1、駆逐艦8！」

リンファ
「戦艦に命じ迎撃させよ！　ミサイル発射用意！」

リンファの指示を受けた3隻の中帝国軍製戦艦が大慌てで回頭するが、一番左にいた戦艦の艦橋に命中弾を受け、操舵不能となった戦艦が僚艦2隻を巻き込んで爆散した。

リンファ
「そ、そんな……」

オペレーター
「う、うわ！　て、敵艦が真っ直ぐ本艦に…」

ガガガーーン！！

リンファ
「きゃあ！！」

ガーン！

衝突の衝撃によりバランスを崩したリンファは頭を強打、そのまま気絶してしまった。

オペレーター
「くっ…バカな…」

宮澤
「突撃！」

バン！！

艦橋のドアを蹴破って入って来たのは宮澤と新井、そして１０人の斬り込み隊。

宮澤
「おっと！　無駄な抵抗は止めろ！　この艦は完全に占拠した！」

陸奥による敵旗艦戦隊撃破と旗艦占拠により防衛艦隊の大半が降伏、
一部が南京モンに逃走した。
また、後続の陸軍により北京はあっさりと鎮圧を完了、日本帝国の
支配下と成った。

次号へ

4　北京攻略戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

5　明石大佐と人材不足（前書き）

書いて気付いた樋口提督の処分が原作だと南京モン攻略の後だった事……まあ、結局一緒か。

5　明石大佐と人材不足

一週間後……北京星域
陸奥艦橋

新井
「そう言えば先輩、樋口提督が軍籍を抹消されたって本当ですか？」

木村
「まあ、当然だろうな。裏のコネを使って軍に復帰した様だが…明石大佐に調べられたら終わりだ」

最上
「他にも８０人以上が中帝国と内通してた事が解って処断されたそうよ」

本間
「だけど…あの現れ方は凄かったですよね」

宮澤
「…だな」

回想……４日前

ビービービー！！

宮澤
「どうした？　敵か！？」

新井
「いえ…宇宙空間に人がいます！」

木村
「はあ？　そんな訳…」

新井
「うわ！？　その『人』が本艦に突っ込んで来ます！！」

4人
「「「「えぇ！？」」」」

ドガーン！！！

窓を突き破って来たのは明らかに忍者の格好した男。

宮澤
「…え～と…まさか、明石大佐ですか？」

明石大佐は日本帝国軍諜報部のトップであり、そのチート能力やらは日本帝国軍でも噂になっていた。

明石大佐
「……（コクリ）」

宮澤

「え～と…では、本艦隊に如何用で？」

明石大佐
「……（チョイチョイ）」

……どうやら耳を貸せと言っている様だ。

宮澤
「はあ…それで？」

明石大佐
（ボソボソボソボソボソボソ）

宮澤
「あ、なるほど。ええ、構いませんよ。ご自由にどうぞ」

明石大佐
「……（コクリ）」

シュン！

新井
「……消えた！？」

何故か嵐の様な数分間であった。

木村
「で、なんだって？」

宮澤

「いや、樋口提督他、中帝国内通者を調査中で、うちの艦隊で事情聴取していいか？って訊かれたから、許可を出しただけ」

最上
「あ、そう。なら、私達は関係ないと」

宮澤
「そう言う事。じゃあ、仕事に戻るか」

本間
「……ところで、明石大佐が突き破ったであろう窓が直っているのは気のせい？」

見ると確かに突き破ったと思われる窓は直っていた。
この為、明石大佐に対するチート能力伝説が第４艦隊内でも広まった。
また、その翌日、樋口提督他８３名もの処分者が出たそうな……。

木村
「お陰で軍内部の風通しも良くなったが…相変わらず人材不足だな～」

宮澤
「仕方ないよ。いくら能力がある人間を引っ張って来たって自ずと限界がある訳だし…」

ピーピーピー

最上
「あら、長門から通信？　しかも、直連絡？　東郷長官から宮澤に通信よ」

宮澤
「うん…もしもし、宮澤です」

東郷
『おう、実は頼みがあってな』

宮澤
「金貸せ、女紹介しろ以外で至極真っ当な頼みなら聞きますが？」

東郷
『…お前、秋山と違う意味で慣れてきたな』

宮澤
「それはどうも…それで、ご用件は？」

東郷
『そうそう、実はな……』

1時間後……陸奥艦橋

リンファ
「…と言う事で日本帝国軍の提督になったリンファです」

真っ赤なチャイナドレスに共有主義の赤本を大事そうに抱いたリンファが挨拶に来ていた。

木村
（色っぽい子だな）

最上
（赤いチャイナドレスがそそるわ～～♪）

宮澤
「うん、東郷長官からは早めに日本軍に慣れる様に面倒見てくれって言われてるからね。まあ、よろしく」

リンファ
「はい…ところで皆さんは共有主義に興味はありませんか？」

新井
（……これがなければ…）

本間
（…素は良い子だと思うんだけど…）

宮澤
「いや、残念ながら間に合っている」

リンファ
「そうですか…」

宮澤
「まあ、取り敢えず自分の艦で待機しておいてくれ。指示は追々出

すよ」

リンファ
「はい。失礼します」

そう言ってリンファは艦橋から退室した。

木村
「あの厄介な嘘赤本が無ければ良いのにな～」

宮澤
「それについては同意する」

宮澤は苦笑しながら言った。

最上
「美人台無しってあの事よ…あ、でも、あのままでも……うふふ♪♪」

新井
「うわ、最上先輩の妄想機能が稼働した！？」

宮澤
「最上、現実に戻って来い…けどな、あの共有熱を抜けば案外優秀なんだけどな～」

明石大佐が調査・作成したと思われるリンファの履歴書を見ながら呟いた。

本間

「けど、いくら人材不足でも元敵軍提督を自軍に採用って大丈夫なの？」

宮澤

「人材不足だからな。それに中帝国はほぼ末期状態だ。放って置いて貴重な人材を失いたくは無い……と東郷長官は判断した…と思う」

新井

「どちらかと言うと…女性だから確保したと言える様な気が…」

4人

「「「「…否定出来ね～～」」」」

次号へ

5　明石大佐と人材不足（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

6　南京モン攻略戦

一週間後……南京モン星域

陸奥艦橋

新井

「先輩、南京モン星域です」

宮澤

「さーて、中帝国の能無し皇帝とアホ諜報部はどんな顔をするかな？」

司令官席で宮澤はニヤニヤと笑っていた。

実は2日前に東郷長官に関して中帝国諜報部の関係した騒動があった。

休暇中の北京で東郷長官がハニートラップに引っ掛かり、『エッチ中の写真』が撮られ、あっちこっちに貼られていると言う騒動。

無論、秋山参謀長は胃を痛め、田中は鼻血噴き出して、南雲さん達は爆笑していたそうだが……しかし、中帝国諜報部は間抜け揃いだったらしく、東郷長官の女性関係が開放的で１０人以上のガールフレンドが居た事や、ガールフレンドが独占出来ないと知っていた事、今さら隠す必要が無かった事…つまり、個人調査が甘かったらしく、東郷長官を丸め込めなかったどころか、写真をばら蒔き過ぎてハニートラップを仕掛けた女性が『謎の中国っ娘』と名付けられて有名になったとか……まったくもって笑うしかない話である。

ただ、これではっきりした事は『売国奴共もハニートラップに引っ掛かって裏切った』と言う事実だった。

しかし、東郷長官は気にするどころか、これをチャンスに南京モン

攻略作戦を実施したのである。

新井
「敵防衛艦隊捕捉。５個艦隊規模です」

木村
「北京で大分削ったからな…まあ、所詮は寄せ集めか」

本間
「そうね。艦隊陣形なんか縦列だし…なに考えてるのかしら？」

最上
「む……司令、小澤提督より通信です。回します」

宮澤
「（本当に嫌いなんだな…）はい、宮澤です」

小澤
『ふふふふふ…祀梨です』

宮澤
「はあ……それで何か？」

横目で見ると最上が「早く切れ」と目で言っていたが、取り敢えず用件は聞いておく。

小澤
『我が艦隊の索敵艦が敵艦隊後方に敵小艦隊とコロニーを発見しました。正体確認をお願いします』

宮澤
「…それは東郷長官も知っていますか？」

小澤
『えぇ、と言うより、調査命令と調査者を出したのは東郷長官ですけどね』

宮澤
「…了解」

小澤
『じゃあ、お願いします…ふふふふふ』

プツン

最上
「命令は確認したわ。さっさと調査して、敵を叩きましょう！」

4人
（（（（本当に嫌いなんだな…））））

内心そう思いながら宮澤は敵艦隊後方のコロニーに向かった。

新井
「な…」

木村

「あれは…コロニー砲か、くそ！」

砲術参謀である木村はコロニー砲に関して小論文を書いた事がある。詳細は省くが、結局言えば今の日本にとってはリスクに合わない…と言うのが結論だったが。

最上
「でも、いったい何時コロニーを調達したの？　コロニー砲作るのに何れだけ…」

宮澤
「コロニー砲はコロニーに手を加えれば直ぐ出来る。そして、中帝国…シュウのガキは少数民族のコロニーを奪って改造したんだ！」

新井
「じゃあ、コロニーの住民は…」

本間
「物言わぬ骸…ってところね」

最上
「今さら始まった事じゃないわ。本隊はモビルアーマーみたいな艦と戦っているそうだけど、無駄な足掻きよ」

本間
「だけど、コロニー砲が敵防衛艦隊の後ろと言う事は味方の防衛艦隊を巻き込むつもりよ！？」

宮澤
「もちろん、叩き潰す！　長門にコロニー砲の事を連絡！　新井、

リンファに通信繋げ！」

新井
「了解！」

直ぐにスクリーンにリンファが映った。

宮澤
「リンファ、君の部隊はミサイル巡洋艦と駆逐艦の混成だな？」

リンファ
『はい。ミサイル巡洋艦４隻と駆逐艦８隻の部隊です』

宮澤
「よし、君の部隊でコロニー砲周辺の敵部隊をミサイルの飽和攻撃と艦砲で撃滅してくれ。我々はコロニー砲を叩く」

リンファ
『わかりました』

木村
「コロニー砲はエネルギー充填中だから、急がんと間に合わない」

宮澤
「なら、エネルギーの溜まっているところに撃ちまくって誘爆させてやる！　突っ込め！！」

２時間後……南京モン　宮殿

シュウ皇帝
「馬鹿な！！！　また、小日本に負けたのか！！！」

ランファ
「で、ですから、早く逃げ……」

ランファがそう言った瞬間、シュウ皇帝は懐から拳銃を取り出した。

シュウ皇帝
「ガメリカの支援が有れば勝てるって言ったよな！？」

ランファ
「あわわわわわ！！」

シュウ皇帝
「結果がコロニー砲も破壊され、艦隊壊滅だと！？　死ね！！！」

ダーン！

ランファ
「きゃあ！！」

撃たれたランファが倒れ、シュウ皇帝は血走った目で周りを見渡す。
そして……

シュウ皇帝
「ガメリカ派の奴は全員死ね！！！！」

その後、約1時間も宮殿から銃声と悲鳴が消えなかった。

1時間半後……南京モンの宮殿

「くっ…ここも酷い有り様だな」

陸軍長官山下利古里大将は率いて来た部隊と共に宮殿を検索していた。

無論、本来の目的は残敵検索だが、この状況では生存者の検索となっている。

山下

「（この様な暴君に帝は不釣り合い…いや、害虫以外の何物でも無い）……ん？」

死者を避けながら歩いていた利古里は微かに動く生存者を見付けた。

山下

「……衛生兵！　誰か衛生兵を呼べ！　早くしろ！」

次号へ

6　南京モン攻略戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

7　南京モンにて（前書き）

兵器の開発過程から見て有り得ない話では無いと思います。

7　南京モンにて

2週間後……南京モン星域

陸奥艦橋

新井
「先輩、新たな中帝国艦艇を捕捉しました」

宮澤
「さて、今回はどっちかな？」

最上
「その中帝国艦艇から通信。交戦の意思は無い、投降したい…だって」

宮澤
「やっぱり…よし、リンファを回して確認してくれ」

新井
「了解」

一通りの指示を出すと少しばかり思考の海に入った。

将官になれば上層部に関する話はたちまち伝わって来る。
ア・バオア・重慶から南京モン奪還艦隊……コロニー砲まで持ち出して来た……が来襲したが、亡命者からの情報により、待ち受けていた防衛艦隊により全滅した。

この奪還艦隊の敗戦から中帝国からの亡命者が大幅に増大した。
そして、もう１つ……ガメリカからマニラ２０００などから日系企業を撤退させろと言ってきた。
御前会議では無視する事になった……よほど中帝国に勝利して領土を取っている事が気に入らないらしい。
とにもかくにも、ガメリカとの関係悪化は前線の人間には二の次、三の次であった。
とにかく、連日やって来る投降艦艇を回収するのが今のところの任務であった。

新井
「…ぱい！　先輩！」

宮澤
「…ん…あ、すまん、ついつい考え事をしていた」

新井
「もう…リンファさんより確認作業が終了、これより合流するそうです」

宮澤
「そうか、ご苦労様」

新井
「それと…東郷長官から伝言で、南京モンのドックに戻ったら……」

南京モン　艦船ドック

南雲提督の艦隊と交代した第４艦隊は南京モンの艦船ドックに帰還した。
すると、一隻だけ見慣れない巡洋艦がドックに収まっていた。

宮澤
「なんだ？　普通の巡洋艦にしては砲戦装備が無いな？」

「新しく開発したミサイル巡洋艦だ。新設計艦なら第４艦隊の方が良いと思ってな」

下から声が聞こえたので下の方を見ると、小さい身体、片手にスパナ、頭に猫を載せた女性がいた。

宮澤
「えーと…あなたは？」

「私か？　私は軍事技術研究所所長の平賀津波少将（ひらがつなみ）だ」

名前を名乗られて漸く思い出した。
名前だけなら聞いた事がある…興味を持てば何でも調べて極めようとする女性だとか。
しかし……大人なのに真希ちゃんと並ぶぐらいの背の低さとは知らなかったが…。

平賀

「1つ訊いていいだろうか？」

宮澤
「はあ…それは平賀少将からの質問ですか？　それとも代弁者の猫からの質問ですか？」

そう…平賀少将は喋らず、頭に載っている煙管（きせる）を身体に巻き付けた猫が代弁していた。

平賀
「あぁ、久重（ひさしげ）ではなく、私からの質問だ。ちなみに久重はこの猫の名前だ」

宮澤
「あ、そうですか…それで？」

平賀（久重）
「うむ、君は艦の性能や数を精神力だけで補えると思うか？」

宮澤
「はあ…確かに艦は人が動かしますが、精神力だけでは補えると言う訳には…第一、いくら旧型の中帝国の駆逐艦１０隻を我が軍の駆逐艦1隻で全滅させろと言う様な事は難しいですから…」

平賀（久重）
「いや、その回答だけで充分だ。さて、話を戻すが、このミサイル巡洋艦は制式採用前の物だ。これの戦闘データを録ってほしい」

宮澤
「つまり、欠陥や欠点を洗い出せと？」

平賀（久重）
「そう言う事だ。では、後は頼んだ」

宮澤
「あ、待って下さい。なぜ、本艦隊を選んだんですか？」

立ち去ろうとする平賀少将が振り向いた。

平賀（久重）
「あぁ、それは簡単だ。艦隊編成に余裕があった事と東郷長官のお薦めがあった事だ」

そう言うと平賀少将はドックから立ち去って行った。

次号へ

7　南京モンにて（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

8　輸送船団護衛任務（前書き）

田中提督のゲームイベントを少し変えて書きました。いや～…田中提督がどう思うか……。

8　輸送船団護衛任務

ある日の事……

宮澤
「…それは本当か？」

新井
「はい、本当です」

整備点検中の陸奥艦橋で新井から報告を聞いていたのだが、ある報告に聞き返した。

宮澤
「本当に今回の輸送船団護送の担当が田中雷蔵提督の艦隊なんだな？」

新井
「はい、今回の護衛は田中雷蔵大佐の艦隊です…それが何か？」

最上
「それが何か？…じゃあ無いでしょう？　田中提督の性格を考えなさいよ」

新井
「…あ、確かに…」

木村

「雷蔵な…あいつは猪突猛進だからな…前回は良かったが、今回は敵が出て来たら、役目も忘れて突撃するぞ、絶対に」

本間
「…で、どうするの？　放って置く気は…なさそうね」

宮澤
「うん…田中提督がどうなるかは知ったこっちゃないが、輸送船団の方は別だ。だから、密かに後ろから付いて行こうと思う」

木村
「それはいいが…陸奥やリンファの艦艇はドックで整備中、天龍と駆逐艦の半数は点検中だぞ？」

宮澤
「確かリンファ隊の駆逐艦が待機中だった筈だな？」

新井
「はい。整備を完了し、待機中です」

最上
「でも、旗艦が動けないわよ？　天龍やリンファ達も動けないし？」

宮澤
「いや、1隻だけ旗艦の代わりを勤める事の出来る艦がある」

本間
「まさか、あのミサイル巡洋艦！？」

宮澤

「あぁ、ミサイル巡洋艦を臨時旗艦とし、駆逐艦１２隻を引き連れて密かに追跡する。よって、これより司令部を移動する」

新井
「あ、でも待って下さい！　海軍司令部には…」

宮澤
「訓練とか、ミサイル巡洋艦の始動実験だとかと言っておけ！　５分後に移動するぞ！」

木村・最上
「「了解！」」

新井
「わ、わかりました！」

ミサイル巡洋艦　艦橋

新井
「なんだか変な気分ですね。味方の輸送船団を守りのに味方のレーダー探知外から追い掛けてるなんて」

木村
「仕方ないんじゃないか。敵を騙すには味方から騙さなきゃならんのだし」

新井

「まあ、そうですけど…」

慌ただしく出撃し、輸送船団&田中艦隊を密かに追跡する第４艦隊。無論、バレない様に追跡しているから一苦労である。

宮澤
「多分…あとで田中提督が殴り込んで来るだろな～」

最上
「まあ、確実に有るでしょうね」

木村
「だが、退く気はないと」

宮澤
「当たり前だ」

ここで退いたら男が廃る……では無く、嫌な予感が宇宙空間を進む事に強く成っているからだ。
これだけはマジだ。

新井
「先輩、もうそろそろ南京モンのワープゲートですが？」

宮澤
「うん……この星域内で仕掛けてくると思ったが…空振りだったか？」

木村
「まあ、空振りは空振りで大丈夫って事だし…」

ビービービー！

新井
「敵艦隊、輸送船団に接近！　田中艦隊は……あ、全艦で攻撃！？」

宮澤
「やっぱり…で、艦隊はどんどん輸送船団から離れているな？」

新井
「あ、はい、その通りです」

木村
「なんつー基本的ミスを犯してんだ、田中のヤンキーは？」

宮澤
「言っても仕方ないよ。新井、敵艦隊が来た反対方向を重点的に見張れ。多分、来るぞ」

新井
「はい……あ、来ました！　間違い無く中帝国艦艇の別動隊です！」

最上
「読み通りに来ちゃったわね」

宮澤
「あはは……全艦戦闘用意。輸送船団を護衛せよ！　ただし、抵抗するなら構わん、殲滅せよ！」

速度を上げた第４艦隊は直ぐに戦闘用意を終えた。

新井
「全艦戦闘用意完了！」
宮澤
「全艦一斉攻撃開始！」
木村
「てぇー！！」
ビュシュシュシュウ！
シュバババババ！
駆逐艦の一斉攻撃に加え、宮澤達の乗るミサイル巡洋艦がミサイル
サイロンに装填されていたミサイルを一斉に発射した。

ズズン！ズズン！ズズン！ズズン！ズズン！
ミサイルや駆逐艦のビーム砲が命中した中帝国艦艇が爆発した。
漸くこちらに気付いたらしい……しかし、輸送船団を狙おうか、こ
ちらを攻撃しようかと迷っているらしく、動きが右往左往している。
宮澤
「敵中で迷うとは愚かな…撃滅しろ」
新井
「了解！」

勢い得たりとばかりに砲撃とミサイル攻撃を繰り返し、敵艦隊を潰していく。

宮澤
「ふむ、ミサイルには通常型に加えて、近接信管を使った散弾タイプも有りかもしれないな。意見具申しておこう」

最上
「暢気な事を言ってる暇は無いわよ。田中提督から通信、繋ぐわ」

スクリーンに現れた田中雷蔵は青筋を浮かべていた。

田中
『やい、お前！　人の邪魔はしないって言ってたじゃねえか！？』

宮澤
「邪魔はしていないんですがね…まあ、暴走ヤンキーの尻拭いならしていますが」

田中
『んだと！！！？』

あぁ～、キレたキレた…まあ、当然か。

宮澤
「本来、君の任務は輸送船団を護る事…つまり、牧羊犬の筈。なのに役目を放り出して猟犬の様に狼に噛み付いて何をしている！！」

田中
『な…『ガガーーン！！！』…プツン』

スクリーンの向こうから被弾音が聞こえた瞬間、画面が消えた。

宮澤
「どうした？」

最上
「あ～…田中提督の乗る旗艦が被弾したみたいね…あとは…ぐちゃぐちゃ」

木村
「ぐちゃぐちゃって…なんでだ？」

最上
「どうやら、旗艦の通信設備を殺られたみたい。それと、田中提督が負傷したみたいよ、軽傷だけど」

宮澤
「……仕方ない。輸送船団護衛は我々が引き継ごう。輸送船団に連絡。田中艦隊は…好きにさせるか」

……結局、輸送船団は無事に日本に到着した。
但し……田中提督の護衛失敗は変わらなかった。

次号へ

8　輸送船団護衛任務（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

9　ア・バオア・重慶攻略戦　～中帝国滅亡～（前書き）

漸く中帝国滅亡です。
まあ、あのガキの死に方にはツッコミは無しで。
次号から数話は日常編になります。

9　ア・バオア・重慶攻略戦　～中帝国滅亡～

2週間後……

ア・バオア・重慶星域

陸奥艦橋

新井
「…で、田中提督は何も言って来なかったですね。拍子抜けしましたけど」

宮澤
「あぁ…どうやら、輸送船団の連中から批判が来た上に小沢提督のシミュレーションで全滅確定が出て…まあ、色々とあったんだと」

木村
「それで、東郷先輩に頭下げて直接指導受けてるって聞いたが…あま、それより目の前のア・バオア・重慶の攻略だな」

新井
「レーダーを見る限り、統制が取れてませんね」

本間
「正に烏合の衆ね。これなら重慶攻略も簡単に出来そうよ」

宮澤
「まあ、最後まで油断は出来ないけどね。さあ、決着をつけよう！」

ア・バオア・重慶内司令部

オペレーター１
「第１２防衛部隊降伏！！」

オペレーター２
「第６８防衛部隊逃走！！」

オペレーター３
「第１２５補給部隊が戦線離脱！！」

オペレーター４
「これでは防衛線を維持出来ません！！！」

この悲壮感たっぷりの報告に只でさえ短いシュウ皇帝の癇癪の尾が更に短くなった。

シュウ皇帝
「何をしている！！！　我が中帝国が小日本に負ける筈は無い！！
　戻って敵と戦え！！　戦わん奴はこうだ！」

近くのコンソールを動かし、逃走しようとしていた中帝国艦艇が爆発した。
どうやらこのガキ大将は艦艇に爆破装置を仕込んだらしい。

シュウ皇帝
「さあ、殺れ！　死にたくなければ小日本艦隊を攻撃しろ！！！」

……ガキが喚いていた。

陸奥艦橋

新井
「先輩、敵防衛線は……ズタズタボロボロです。つーか、影も形もありません」

進めば進む事に既に崩壊した防衛線が見える。
これには拍子抜けしそうだ。

山下
「宮澤少将、そろそろア・バオア・重慶に突っ込んで良いのではないか？」

……何故か乗っている陸軍長官の山下利古里長官。
いや、つーか、東郷先輩の突拍子な考えだ。
惑星の軍事担当の陸軍と宇宙の軍事担当の海軍の仲が悪いから、ちょっとでも溝を埋めるべく、今回は陸奥に乗って貰った……と言うこと。まあ、陸軍との関係改善は大歓迎ですよ……先に乗る方の陸奥と第４艦隊に連絡してくれてたら良かったんですけどね！！

山下
「……（ジ～～）」

宮澤
「……なにか？」

山下
「いや、東郷の後輩と聞いていたから、同じ女たらしかと思えば普通だったのでな…もうそろそろ尻尾を出すかと…」
……利古里さん、あんたそんな目で私を見ていたんですね……
もう、いや。

ビービービー！

新井
「敵捕捉！　敵は……どうやら、艦艇を繋げた塊です！」

宮澤
「やれやれ、ここの防衛にコロニー砲は出すわ、パンダは出すわ、艦艇の塊を出すわ…無駄な足掻きをしてやがる」
空気の無い宇宙空間にパンダがいたのは驚いた……さすが中帝国…。

山下
「なにをしている！　吶喊（とっかん）だ！　吶喊！」

宮澤
「……どこにですか？」

山下
「あの鉄の塊だ！」

……時間の無駄だな。

宮澤

「回避進路を取れ。但し、掠める様にな」

本間
「了解」

山下
「貴様！　敵に背中を見せるのか！？」

…基本的に山下長官は良い人であろう…ただ、手柄を焦っているのと精神主義者である事を除けば。

宮澤
「山下長官、我々の任務はなんですか？」

山下
「ア・バオア・重慶の攻略だ！」

宮澤
「なら、我々は任務を果たしましょう。いいですね？」

山下
「くっ…しかし、あの塊はどうする！？」

宮澤
「なに、一突きすれば終わりですよ」

新井
「先輩、敵艦の塊の真横に出ました」

宮澤
「一斉射撃、撃て」

本間
「撃て！！」

ビシューウ！ビシューウ！ビシューウ！ビシューウ！

陸奥以下第４艦隊艦艇の砲門が中帝国艦艇の塊に向かって火を吹いた。
艦艇をただ引っ付けただけの塊は旋回性が無く、必死に回頭しようと舵をきったが時既に遅く、あっという間に第４艦隊の集中砲撃を受け大破・炎上した。

宮澤
「ほら、真っ正面から相手にするよりも短時間で済みましたよ？」

山下
「……」

何故か沈黙した山下長官……まあ、このままでも問題は無いので放置しておく。

新井
「先輩、ア・バオア・重慶のドックに突入します！」

宮澤
「よし、直ぐに付近を制圧。陸軍の宮殿制圧を援護する……それでいいですね？」

山下

「…え、あ、う、うむ、それで構わないぞ」

ア・バオア・重慶　宮殿

宮殿内は兵士や侍女達が右往左往していた。
日本軍がドックを制圧したとの情報に誰もが逃げようと思っていたからだ。

シュウ皇帝
「こら、お前達！！　なにをしている！　私を守れ！！　小日本と戦え！！」

血に染まった青竜刀を振り回しながらシュウが怒鳴った。
右往左往していた兵士や侍女達が立ち止まった。
しかも、殺気立った目で睨み付けて。

シュウ皇帝
「な、なんだその目は！？　お前達がだらしないからこうなったんだろうが！」

だが、ますます睨まれた。更にいつの間にやら、シュウ皇帝の周りには鍬や鋤、木の棒、竹槍、包丁などで『武装』した一般民衆達が取り囲んでいた。
しかも、同じく殺気立った目で睨み付けいる。

シュウ皇帝
「お、おい！　何をしている！　早くこいつらを追い出せ！！」

誰も聞いていなかった…いや、更にシュウににじり寄り、シュウを追い詰めていく。

シュウ皇帝
「や、や、やめろ！　私を誰だと思っている！　現中帝国皇帝だぞ！？」

壁の隅に追い詰められ、叫ぶも聞かず……シュウはやがて人垣に呑み込まれていった。

３０分後…宮殿

宮澤
「暴君の最後…とはあの事だな」

宮殿にやって来た第４艦隊の面々は壁の隅に汚れた布を掛けられた『人間だった物』を見ながら話していた。

新井
「あれぞ正に『肉片』ってやつですね…見たくありませんけど」

木村
「よほど怨まれてたんだな。まあ、念仏を唱える気にもならないがな」

最上

「けど……何時までもあのままって訳にはいかないでしょう？」

宮澤
「そのまま火で焼くのが一番だ。そういえば山下長官、シュウを殺害した住民・兵士・侍女達はどうします？」

山下
「うむ…実際、殺人罪でどうこうして良いのだが…どう頑張ってもそれは難しい。それに暴君であった事を考えれば自業自得なのでな、このまま知らないフリをしておこう」

宮澤
「そうですね」

……こうして、中帝国は日本帝国（と自国民達）によって滅亡した。

次号へ

9　ア・バオア・重慶攻略戦　～中帝国滅亡～（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１０　新参謀で困惑

ア・バオア・重慶攻略…あるいは中帝国滅亡…から１ヶ月、回復していた元中帝国星域の治安も安定し、平和を取り戻していた。
しかし……日本を取り巻く環境は安定するどころか悪化し、ガメリア共和国からは中帝国領からの軍撤退（まあ、中帝国の利権を盗られたからだろうが）を要求してきて、ガメリアとの関係が悪化していた。
また、ヨーロッパ方面ではドクツのアイドル兼総統レーティア・アドルフがポッポランド共和国・北欧連合王国に侵攻・陥落させ、エイリス帝国・オフランス王国と対立状態であった。

日本星域　日本軍司令部

宮澤
（……で、なんで呼ばれたんだ？）

漸く中帝国との戦争も終わり、日本へ帰還した連合艦隊は現在骨休め中だ。
まあ、第４艦隊は正式に提督になったリンファが重慶攻略戦前に艦隊を与えられていたから離脱したが、今度は負傷し平賀少将が預かっていたランファが回復したので第４艦隊に配属された。
最初は男子を見るだけで逃げていたが……最近は慣れてきたらしく、気軽に声を掛けてくれる様になってくれたが。

宮澤

（だからと言って……その事では無いよな）

なお、中帝国滅亡後は元中帝国兵士は厳正な審査の後に日本軍に編入されている。
また、投降・鹵獲・摂取した中帝国艦艇は次々に解体され、溶鉱炉の中に放り込まれている。
艦艇関係では宮殿に隠されていたシュウ皇帝の隠し財産の『金の大船』が発見され、こちらも解体されている。
ただ、金の方は丁寧に回収したそうだが…。

宮澤
（だが……艦艇の事でも無い様な気がする……なら、なんで東郷先輩に呼ばれたんだ？）

あれこれ考えながら廊下を歩いたが、結局解らずじまいであった。

司令部

宮澤
「新たな参謀要員ですか？」

東郷
「そうだ。速成だが、シュミュレーションでは俺やお前と並ぶ位の好成績を残している」

宮澤
「はあ…ですが、なぜ第４艦隊に？」

東郷
「本人の希望だ」

宮澤
「希望ですか…（なんとも変わった人だね）…それで、その参謀要員は？」

東郷
「もうそろそろ来る筈だが……まあ、秋山がまた胃痛を起こしていたがな」

宮澤
「はあ…秋山先輩が…胃痛ですか」

……ん、なんで秋山先輩が胃痛をおこすんだ？
女性関係だからか？

東郷
「お、来たか。ここだ」

入って来た人物を見る為、入り口の方を見て驚愕した……だって……

宮澤
「ま、マーリー！？」

日本軍の軍服に身を包んだマーリンが居たから……

東郷
「じゃあ、そう言う事だから、あとは頼んだ」

宮澤
「え、あ、ちょ、ちょっと、東郷先輩！？」
笑いながら司令部を出て行く東郷に宮澤は慌て声を掛けたが、そのまま出て行ってしまった。

宮澤
「……とりあえず、陸奥に行こうか？」

マーリン
「えぇ、そうしましょう」

宮澤
「…話してもらおうか？」
陸奥が入るドックに向かう廊下で宮澤が頭を抱えながら訊いた。

マーリン
「いつ、軍に志願したかを？」

宮澤
「なぜ軍に志願したかだ」
何時よりも理由が知りたい。

マーリン
「簡単よ。あなたの部屋であなたの帰りを待ってるのが我慢出来な

いから」

宮澤
「なんとまあ……一言言ってくれればよかったのに」

マーリン
「絶対に反対するでしょう？」

宮澤
「したな、絶対に」

マーリン
「だからよ」

宮澤
「はぁ～～あ……」

盛大な溜め息を吐いた宮澤。
その顔は諦め顔だ。

宮澤
「…まあ、認定された物はどうしようもないな」

マーリン
「あら、少将のあなたなら、取り消せそうだけど？」

宮澤
「東郷長官が横槍入れるから、絶対に無理」

マーリン

「ふ～ん」

…しかし、こうなれば成るように成れだ。

宮澤

「……参謀要員着任を認可するよ」

マーリン

「うふふ、ありがとう、宮澤少将殿」

宮澤

「…『少将』も『殿』も要らないよ」

次号へ

１０　新参謀で困惑（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

11　神風の儀式

1週間後……第4艦隊旗艦陸奥

宮澤
「…『富嶽』ですか？」

秋山
「そうです、『富嶽』が確認されました」

マーリンを参謀に加え、賑やかになった第4艦隊旗艦陸奥に秋山参謀長が遣って来た。
ちなみに『富嶽』と言うのは、この世界に存在する五大怪獣の1つで、シベリア―日本―マイクロネシア間を回遊し、日本では『星喰らい　富嶽』である。
他には『飛来する災厄　エアザウナ』・『真理を伝える者　ニガヨモギ』・『輝ける皇冠　ザラマンダー』・『宇宙蜜アリ　ガワタスガル・ビゥ』である。
なお、この中で人類が制御している唯一の大怪獣がアボリ人が操ると言われている『宇宙蜜アリ　ガワタスガル・ビゥ』だと言われている。
後は…制御も何も効かない狂暴な大怪獣である。

宮澤
「それで帝が『神風の儀式』を行うのは解ります。それと我らと何の関係が？」

秋山

「儀式は長門で行います。ですが、念のために代艦の陸奥を同行させます」

木村
「つまり、代理人が欲しいって事だな」

最上
「必要無いと思うけどね」

本間
「まあ、念のためですしね。それに滅多に見れない物を見れる訳ですから」

マーリン
「そうね。私はミカドを一度も見たこと無いのよね」

新井
「あ、自分もです」

最上
「私は…あ、見たこと無いわ」

ワイワイガヤガヤ……

……何故か帝の話で盛り上がってしまった陸奥艦橋。

秋山
「…『神風の儀式』は見せ物ではありません！！」

勝手に盛り上がったのがいけなかったのか、秋山参謀長の声が響いた。

秋山
「とにかく、そうゆう事ですから、お忘れなく」

そう言うと艦橋から出て行った。

最上
「なによ、別に良いじゃない」

本間
「なんだか…ピリピリしてなかった？」

新井
「ガメリアとの関係悪化が原因ですかね？」

マーリン
「多分、東郷長官の女性関係が原因でしょう」

最上・木村・新井・本間
「「「「あぁ、納得出来る」」」」

宮澤
「おまえら……まあ、儀式に代理役で同行しろと言うなら、否応なしに同行するしかないよな」

数日後……『神風の儀式』当日

長門の真横に並び航行する陸奥。
その先には目的の大怪獣『星喰い　富嶽』の姿が見える。

木村
「生で『富嶽』を見るのは始めてだが……戦艦がプラモデルサイズに見えるくらいデカいな」

宮澤
「俺も始めてだ。しかし、本当に人間は逆立ちしても自然に勝てないってつくづく思うよ」

木村
「だな……それに対して、この違いはなんだ？」

相棒同士が『富嶽』関連の話をしている左側で主に女性陣達がキャアキャアと声を上げている。

宮澤
「帝待ちのギャラリーだな」

木村
「……本当に大丈夫か？　これで？」

宮澤
「大丈夫だろう」

最上
「あ！　『神風の儀式』が始まるみたい！」

この最上の言葉に振り返ると長門の甲板に帝が出て来た。
あ、帝と言っても男ではありません、少女です。

新井
「あれ……帝の後ろにいるのは柴神様ではないですか！？」

木村
「うん？……本当だ、柴神様だ！」

柴神様と言うのは実在する日本の神様で、不老不死であり、代々の帝を選んできたお人（つーか、柴犬人間？）である。
日本人なら歴史の授業で必ず出てくるから、非常に広く知られている。

本間
「柴神様も初めて生で見るわ」

宮澤
「……まあ、休日返上で来ただけの事はあるか」

マーリン
「え、そうだったの！？」

宮澤
「……うん」

……この瞬間、艦橋内にいた全員が宮澤を睨み付けた。
しかも、殺気を出して。

宮澤
「お、お、落ち着け！　代理休暇1週間を全員に取ってあるから！」
木村・本間・マーリン・最上・新井
「「「「「本当に！！？」」」」」
宮澤
「本当だ！　マジで本当だ！　何なら東郷長官に確認してくれー！！」
最上
「新井、確認しなさい！」
新井
「了解です！」
木村
「もし、これで嘘だったら……どうなるか解るか？」
宮澤
「……どうなる？」
本間
「宇宙に放り出します」
宮澤
「…あはは、あはははは……マジで？」
マーリン
「私が嘘を言った事がある？」

宮澤
「……ありません（……もしこれで宇宙に放り出されたら…東郷先輩を永遠に呪ってやる〜〜！）」

数分後、無事に『神風の儀式』も終了し、富嶽も撃退された。
また、代理休暇の確認も終わり、事なきを得たのは別の話だが……。

次号へ

11　神風の儀式（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

12　休暇編　1（前書き）

すみません…更新、遅れました。

12　休暇編　1

2日後……

宮澤
「持ち物オッケー、戸締りオッケー」

マーリン
「じゃあ、行きましょう！」

南雲
「へえ～、2人一緒に何処に行くんだい？」

宮澤・マーリン
「「うひゃ！？」」

いきなり声を掛けてきた南雲に驚く宮澤・マーリン。

南雲
「おっと…普通に声を掛けただけなんだけど…驚かせちゃったかい？」

宮澤
「あ、南雲さん…すみません、こちらこそ驚かせてしまって…」

……なんか、堂々巡りです。

南雲

「あ、いいんだよ…それより、楽しそうにして、何処に行くんだい？」

マーリン
「はい！　これから一泊2日の温泉旅行です♪」

宮澤
「せっかくの1週間休暇ですから、ちょっと小旅行でも…と思いまして」

南雲
「いいね～、今度私も東郷の旦那に休暇を申請してみようかね？」

宮澤
「それはいいと思いますよ…では、僕達はこれで」

南雲
「ん、あぁ…あ、お土産は適当でいいから」

マーリン
「はーい！」

その頃……最上の部屋

木村
「最上～、いるか～？」

最上
「あ、なに～？」

木村・新井・本間の３人は最上の部屋に来ていた。

新井
「これから、手の空いている同期生達とボーリングに行くんですが、最上先輩も来ませんか？」

最上
「あ～、ごめん、今は全然手が離せないの。また今度誘ってね～」

本間
「あらら…じゃあ、手が空いたら電話してね～」

最上
「オッケー、じゃあ、また～」

玄関で手を振って木村達を見送ると、最上は直ぐに部屋に戻り、起動させていたパソコンを見た。

最上
「キャア～～！　やっぱり、休日はこれよね～♪」

……ＧＬ好きの最上はこうして定期的にネット仲間と情報交換をしている。
いま見ているのはドクツのネット仲間からの情報である。

最上
「ふ～～ん……あ、あの人からだ」

掲示板を見ていた最上は、あるブログで目を止め、そのブログをクリックした。
ちなみに名前は『プロデューサー』である。

最上
「え～と、なになに…『次回イベントの衣装を考察中。ご意見待ってま～す☆☆』ね」

既に何度か（ブログで）やり取りした事のあるユーザー名なので、最上は直ぐにキーボードを叩き始めた。

宮澤とマーリンはリニア新幹線で目的地の温泉へと向かっていた。
実際、今までこんな風に2人で旅行をした事は無い。
良くて2人でちょっとそこまで…と言ったところだ。

宮澤
「さて…何処を回ろうかな…マーリー、君の希望は？」

マーリン
「う～～ん……どこでもいい」

宮澤
「そうか…そう言われるとちょっと難しいな…う～ん…」

脳内で案内パンフレットを片手に旅行プランを組み立てる宮澤。
温泉と旅館の予約以外は白紙と言うツッコミの要る旅の始まりだった。

その頃……海軍司令部

山下
「……おい、東郷」

東郷
「ん、なんだい、利古里ちゃん？」

山下
「馴れ馴れしく呼ぶな！　ところで第４艦隊司令の宮澤少将はどこだ？」

東郷
「なんだ、あいつに惚れたか？」

山下
「違う！！　貴様、叩き斬るぞ！！」

怒った山下長官が刀の柄に手を延ばす。

秋山
「東郷長官…あなたと言う人は……山下長官、宮澤少将に何の御用ですか？」

山下
「あ…コホン、宮澤少将にア・バオア・重慶の事で礼を言いに来た

だけだ」

東郷
「俺のところではないのか…それは残念だ」

山下
「誰が貴様に礼など言うか！！　それで、彼は何処にいる！？」

秋山
「宮澤少将は休暇で一泊2日の温泉旅行に行きましたが…」

山下
「温泉？　1人で？」

秋山
「いえ、ご同伴が…「おい、秋山。あの書類は何処だ？」…そこの机ですよ」

山下
「それならば仕方ない…また今度にしよう」

そう言うと山下長官は海軍司令部から出て行った。

秋山
「絶妙なタイミングで話を中断させましたね？」

東郷
「はっはっはっは、何の事だ？」

秋山

「…本当に、あなたと言うお方は…」

次号へ

12　休暇編　1（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

13　休暇編　2

温泉地……夕暮れ時

マーリン
「お風呂♪　お風呂♪　お風呂♪」

宮澤
「…おいおい」

温泉地の道路を浴衣を着たマーリンがウキウキしながら歩いていた。
今は湯巡り中だ。

マーリン
「あ、次はあの足湯ね～♪」

宮澤
「はいはい……まあ、振り回されるのもいいか」

そう呟くと振り回されるべく、後を追い掛けるのであった。

その頃……海軍司令部棟内

山本
「そう言えば…今日は朝からあの若僧を見ねえな」

賽子を軽く放り投げながら山本中将が呟いた。

古賀
「宮澤さんですか？」

小澤
「そう言えば見ませんね…何をしているんでしょうか？」

田中
「ふん、どうせさぼってんだろう」

「あれ、皆さんご存知無かったんですか？」

提督達の会話に入ってきたのは軍の事務職員で、東郷長官の交際相手の1人である五藤（ごとう）ミサキだった。

小澤
「何か知っているんですか？」

五藤
「えぇ、宮澤少将は一泊2日の温泉旅行に行っています」

山本
「若僧1人でか？」

五藤
「まさか～、新しく参謀になった女の子と一緒に…」

田中
「な、何だと！？　女の子だぁ！？」

何故か田中が反応した。

田中
「おい！　あいつは何時その女の子を落としたんだよ！？」

五藤
「落としたって…マーリンさんとは同棲しているんですよ？」

田中
「な、な、な、な、なんだって！！？」

山本
「ほう、あの若僧、中々やるとは思っとったが、やるじゃねえか」

小澤
「……つまんない」

田中
「同棲だと！？　あいつはどれだけ俺の先を行く気なんだ！！」

古賀
「あの…田中さん、どうかなされたんですか？」

山本
「放っておけ。先を越されたのを我慢出来んのだろう」

笑いながら山本は賽子を放り投げた。

その頃……

宮澤
「…クッション！」

マーリン
「どうしたの？　風邪？」

宮澤
「違う、誰かに噂されたみたい」

温泉巡りから帰って来た2人は部屋で寛いでいた。

マーリン
「う～～～ん…フカフカで気持ち良い布団～♪　幸せ～♪」

宮澤
「本当に単純だな」

マーリン
「は～い、単純で～す♪」

宮澤
「やれやれ」

そう呟きながら溜め息を吐いた時、手元のケータイが鳴った。

宮澤
「はい、もしもし。宮澤ですが？」

『あ、みーちゃん？　元気？』

宮澤
「…真希ちゃん？」

東郷先輩から、おふざけの電話か？…と思ったら娘の真希ちゃんからだった。

宮澤
「どうしたの、真希ちゃん？　何かあったの？」

真希
『ううん、違うの。お父さんが「みーちゃん1人で寂しいかも知れないから電話してやりな」って言ってたから電話したの』

……訂正、真希を通してふざけました…あの野郎…。

宮澤
「あはは…真希ちゃん、お父さんは近くにいるのかな？」

真希
『んーん、もう出掛けちゃったよ。今夜もデートだって』

…上手いこと逃げやがったか…。

真希
『みーちゃん、マーリンお姉ちゃんとお話したいから代わってくれる？』

宮澤
「ん、あぁ、いいよ。マーリー、真希ちゃんから」

マーリン
「はいは～い…あ、代わったよ～、真希ちゃ～ん」

宮澤
（さて、女の子同士のお喋りに男は不要だな）
そう思った宮澤は密かに部屋から出て行った。

マーリン
「……ねえ？」

宮澤
「なに？」

真希ちゃんとのお喋りを終え、布団に潜り込んだ2人。
暫くしてマーリンが喋り掛けてきた。

マーリン
「…真希ちゃん、やっぱりお母さんさんが居ない寂しいのかな？」

宮澤
「否定は出来ないな…だが、真希ちゃんは芯が強いから、敢えて表に出す事は無い…東郷先輩もそれは解っているだろうし」

2年前にワープ事故で行方不明になったスカーレットさん……宇宙で行方不明＝死亡がほぼ確実なだけに、真希ちゃんは「居なくなった」としか認識していない。
しかし……まだ幼いだけに甘える肉親が近くにいないとゆうのは……

宮澤
「それに……スカーレットさんが簡単に死ぬ人だとは思えないしな」

マーリン
「……」

宮澤
「あ、ごめん…」

マーリン
「いいよ、別に……私達の子はそう成らない様にしようね」

宮澤
「え、わた…わぁ！！？」

いつの間にか宮澤の布団に入り込んでいるマーリン。

宮澤
「あ、あのー…マーリンさん？」

マーリン
「何時まで経っても何もしてこないから…処女の私をこのまま放置する気？」

宮澤
「え、あ、いや…その……どうなっても知らないぞ？」

マーリン
「４年も一緒に居た女に言う事？」

宮澤
「……だよな」

そう言うと唇を奪った。

次号へ

13　休暇編　2（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１４　休暇編　３（前書き）

実際的には休暇編はこれで最後です。
さて……大戦編は何時になるやら…。

14　休暇編　3

宿屋の一室

宮澤
「……」

マーリン
「スー…スー…スー…」

頭に手をあて赤面・沈黙する宮澤……生まれたままの姿のマーリン…。

宮澤
「…やっといてなんだけど…めちゃくちゃ恥ずかしい…」

記憶の断片を繋ぐ限り……3回は抱いてる様な……。

宮澤
「恥ずかしい……超恥ずかしい…」

赤面しながら頭を抱える宮澤だった。

その頃……日本海軍司令部内

平賀（久重）

「う～～～む……」

うず高く積まれた設計図や計算用紙と睨み合いを続ける平賀少将。
……どうやら色々とお忙しい御様子。

平賀（久重）
「ふむ……ん、これは…」

たまたま手に取った意見書を見た津波は一読するとフッと笑った。
その意見書の下には『第４艦隊司令　宮澤清志少将』の署名があった。

久重
「何かありましたか、津波様？」

平賀
「（ボソボソボソボソボソボソ）」

久重
「ニャニャア！？　『あいつは中々いい奴だ』！？　何をいってるんですか、津波様！？」

平賀
「……（グリグリ）」

久重
「フニャー！！　スパナでグリグリは止めて～！！」

……研究室に久重の悲鳴が響いた。

その頃……

マーリン
「う～ん……おはよう～」

宮澤
「…おはよう…」

一足先に朝食を摂っていた宮澤に寝起きマーリンが声を掛けた。

マーリン
「あら、口数が少ないわね、どうしたの？」

宮澤
「気恥ずかしいの…夜の事で…」

マーリン
「…そうよね～、初めてで連続3回は思い出すだけでも恥ずかしいわね～。しかも、最後は一緒だったよね～」

宮澤
「…言わないで…余計に恥ずかしい…」

茹で蛸の様に顔を真っ赤にする宮澤……水を掛けたら湯気が出そうだ。

マーリン

「うふふ、朝ご飯食べたら、続きでもする？」

宮澤
「ダメ、皆のお土産を選ぶんだよ…と言うより、なんでそう成っちゃうの？」

マーリン
「好きな人とはず～～と一緒に居たいものよ。それにエイリス貴族婦女子は案外エッチなんだから♪」

宮澤
「……とにかく、朝食を食べなさい」

…俺は親か？…とツッコミを入れたい宮澤だった。

その頃……皇居

「御前会議が始まるよ～～♪」

…何とも気の抜けそうな始まりの挨拶をする幼き少女。
この少女こそ、現在の『帝』である。

山下
「あの、帝…その挨拶はどうかと…」

帝

「そうですか？　私はこの方が好きですよ？」

山下
「はあ…」

帝
「では、宇垣。外交報告を」

「はい」

返事をすたのはW字髭と禿げた頭のX形古傷が特徴の宇垣（うがき）さくら外務長官。

宇垣
「ガメリカとの関係改善と制裁緩和を目的に交渉を続けておりますが…」

帝
「苦戦中…と？」

宇垣
「は、こちらも色々と柔軟に交渉しておりますが、なんとも…まるで亀の様に強情でございます」

帝
「はぁ…困りましたね」

山下
「帝、こうなれば仕方ありません。我が国を守る為、宣戦布告を…」

帝
「それはなりません。まだ余地がある状況下で自ら交渉の扉を閉めるのは我が身を滅ぼすのと同じ事です」

山下
「しかし！」

東郷
「私は帝の考えに賛成です」

今まで口を開いていなかった東郷が発言した。

山下
「東郷！　貴様もか！？」

東郷
「落ち着こうよ、利古里ちゃん。帝の考えは筋が通っている。それに軍全体の準備が整っていない。漸く中帝国との戦争が終わった。確かに国力や兵力は確保出来たが、それだって充分では無い」

山下
「それぐらい、精神力でどうにかなる！」

東郷
「それについては無理があるよ。帝、私の部下の１人で提督の宮澤清志少将と言う者がおり、元中帝国兵と新兵の育成を担当しております。その宮澤少将の報告によりますと、育成・熟練にはまだまだ時間を有します。更に新型艦・新造艦の開発・建造も同様です」

帝
「…やはり、ギリギリまで交渉しましょう。ですが、最悪の結果に対する準備はして下さい」
3人
「「「わかりました」」」

その頃……

マーリン
「お土産はどうする？」

宮澤
「やっぱり、ここはお饅頭とかの茶菓子だな。真希ちゃんは…何にしようかな？」

色々とお土産屋さんを回りながらあれこれ考える宮澤・マーリンのカップルだった。

次号へ

１４　休暇編　３（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１５　休暇明け（前書き）

日常編はここまで…次号より大戦の足音が……。

15　休暇明け

休暇終了の翌日……海軍司令部

宮澤
「おはようございます」

南雲
「おはようさん。温泉は楽しんだかい？」

宮澤
「えぇ、存分に…あ、お土産です」

そう言いながらお饅頭の箱を南雲に渡す宮澤。

南雲
「一箱も？　いいのかい？」

宮澤
「えぇ、まだまだ一杯有りますから」

見ると台車４台にお饅頭の箱がこんもりと載っている。

南雲
「……どうしたんだい、あれ？」

宮澤
「いえ、実は…お土産屋さんで店主から『軍人さん？』と訊かれて、

はいと答えたらあっちこっちの人達から色々とサービスされちゃって…何でも、中帝国との戦争が終わって漸く客足が戻ったとかで…」

南雲
「あぁ、なるほどね。しかし、よくもこんなに持ってこれたね？」

マーリン
「え～と…実は宅配便で今日届く様に手配して頂きまして…」

南雲
「…まあ、物理的に考えてみれば当たり前か」

山本
「お、若僧じゃあねえか。温泉はどうだったんだ？」

古賀
「宮澤さん、楽しめました？」

宮澤
「はい。あ、これはお土産のお饅頭です。あと、山本提督はこっちですよね」

そう言って地酒の一升瓶を渡す。

山本
「はっはっは、若僧にしちゃあ、解ってるじゃあないか」

サワサワ

古賀

「きゃっ！　山本さん！」

山本
「わっはっは、今日も良い尻だな～」

宮澤
「…くれぐれも飲み過ぎにはご注意を」

…本当ならもっとツッコミを入れたい事はあるが、山本の爺さんに言っても何の意味も無さそうなので止めておく。

小澤
「お久し振りです」

宮澤
「お久し振りです。あ、これはお土産です」

小澤
「…ありがとうございます」

五藤
「おはようございます、マーリンさん」

マーリン
「おはよう、ミサキ。はい、お土産」

五藤
「ありがとう～」

宮澤とマーリンは来て早々、お土産配りに専念していた。

東郷
「よう、楽しんで来たか？」

宮澤
「えぇ、久しぶりにゆっくりできましたよ。秋山、これ、つまらない物ですが」

秋山
「ありがとう」

東郷
「俺のは無いのか？」

マーリン
「昨夜、真希ちゃんに渡しました」

東郷
「手の早い奴だな」

宮澤
「女性に対する手の早さはあなたに負けますがね」

秋山
「2人共…」

山下
「失礼するぞ！」

呆れる秋山参謀長の声をかき消し、何かの殴り込みか？…と言わんぐらいの勢いで海軍司令部に入って来た陸軍長官の山下利古里長官。

山下
「先程、宮澤少将が顔を出したと聞いた！　隠すと為にならんぞ！
何処に居る！？」

全員
「「「「「「「「「「「「「ここに居ますが？」」」」」」」」」」」」」」」

司令部に居た全員が普通に言った。

山下
「あ、そうか…す、済まない」

宮澤
「おはようございます、山下長官。これ、つまらない物ですが、お土産です」

山下
「あ、う、うむ、ありがとう…」

どぎまぎしながら受け取る山下長官。

マーリン
「あの…少将に何の用ですか？」

山下
「あ、あぁ、そうだった。ア・バオア・重慶の礼を言いに来たのだ」

宮澤
「そんな、礼なんて…当たり前の事をしたまでで…」
東郷
「そうだぞ、利古里ちゃん。礼なら…」
山下
「誰が貴様に言うか！！　ふん！　用は済んだ、帰る！」
そう言うと宮澤から渡されたお饅頭箱を小脇に抱えて出て行った。
マーリン
「……なんだったのかしら？」
宮澤
「…東郷先輩、一言余計でしたね」
東郷
「はっはっは、今日もフラれてしまったな」
秋山
「話を誤魔化さないで下さい」
胃の辺りを押さえた秋山参謀長が言った。
宮澤
「あ、すみません。もうそろそろ時間ですので、お土産をここに置いときますね」

秋山
「えぇ、こちらで配っておくよ」

宮澤
「ありがとうございます。じゃあ、行こう、マーリン」

マーリン
「えぇ！」

そう言うとドックへと向かって行った。

秋山
「…あの2人、休暇前より仲良くなっていませんか？」

東郷
「まあ、当然だろうな。男女で温泉と言えばやる事は1つだろう？」

秋山
「…あなたじゃあないんですから」

もの凄く呆れながら秋山参謀長が呟いた。

陸奥艦橋

宮澤
「おはよう、みんな」

新井
「おはようございます」

木村
「おはよう、相棒」

本間
「おはよう、２人共」

最上
「ふぁ～、おはよ～う」

宮澤
「最上…また寝る間も惜しんでネットをやってたな？」

最上
「別にいいじゃない…ふぁ～～」

マーリン
「あらあら…眠気覚ましの紅茶が必要かしら？」

宮澤
「いやいや、君の特別ティーの方が…」

木村
「こら、そこ～、イチャイチャなら勤務時間外にやれ～」

宮澤
「はいはい…新井、今日の訓練メニューを見せてくれ」

新井
「わかりました」
……以上、休暇明けの第４艦隊司令部でした。
次号へ

１５　休暇明け（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１６　開戦への足音　上（前書き）

漸く開戦…だけど前後編です。
さて…柴神様を何時出すか…。

16　開戦への足音　上

一週間後……第４艦隊旗艦陸奥艦橋

新井
「先輩、大変です！」

木村
「なんだ、遂にガメリカがトチ狂って宣戦布告してきたか？　あ、もしかしてソビエトか？」

新井
「違います！　ドクツがオフランス王国に侵攻！　パリが陥落しました！」

４人
「「「「ふ～ん、だから？」」」」

新井
「……あれ？　予想済み！？」

本間
「忘れたの？　私の母親はオフランス人よ？」

本間の両親は母親が生粋のオフランス人、父親が生粋の日本人だ。

マーリン
「それにオフランス王国の場合、平和主義だからマジノ要塞ライン

にお金を掛けてた筈よ。マジノ要塞が抜かれたらオフランスは終わだわ」

新井
「さすがエイリス生まれのマーリン参謀、お隣を良くご存知で」

マーリン
「…オフランス連中がバカなだけよ」

呆れた様に呟くマーリン。

宮澤
「まあ、オフランスの平和ボケは置いといて…問題は世界情勢だな」

マーリン
「そうね。実質上、ドクツに対抗できるのはヨーロッパ星域ではエイリス帝国のみね」

本間
「あとはガメリカ共和国とソビエトだけど…問題はどっちに来るかね」

宮澤
「ガメリカは間違い無く日本を叩き潰す気だから…こっちに重点を置くだろうな」

新井
「じゃあ…」

木村

「いよいよ…と言ったところだな」

……翌日　海軍司令部

宮澤
「…え、自分が、皇居にですか！？」

東郷
「おう、秋山の代わりにな」

朝も早くから海軍司令部に呼ばれた宮澤は東郷から皇居への同行を指示された。

宮澤
「ですが…自分は一介の艦隊司令です…いくら何でも…」

東郷
「ガメリカとの戦争が近い。今日の御前会議で何かしら騒動を起きると俺は思う…だから、お前の考察を言ってくれ。あ、必要ならマーリンを連れて行ってもいいぞ？」

宮澤
「そんな無茶苦茶な！　一介の艦隊司令の考察を海軍全体の考察にしちゃうんですか！？　それに、それなら東郷先輩の方針が…」

東郷
「いったい何年先輩と後輩をやってると思っているだ？　お前の考

えはお見通しだ」

宮澤
「…お見通しって…」

東郷
「ほら、さっさと行くぞ。マーリンに電話しなくていいのか？」

宮澤
「え、あ、えぇ！　今から！？　ま、待って下さいよ！」

慌てケータイを引っ張り出しながら東郷を追い掛ける宮澤だった。

……結局、マーリンを連れて皇居へと遣って来た。

宮澤
「……まさか、この門を潜る事になろうとは…」

マーリン
「…私も…」

東郷
「なにしてる、行くぞ」

勝手知ったるなんとらやの如くズンズン進む東郷…それに慌てて付いて行く2人。
それもそうだ、ここは言わば『帝』の住居、2人はガチガチに緊張していた。

そして、ある襖を開けると山下利古里陸軍長官と宇垣さくら外務長官が居た。

山下
「…東郷、なんでその2人が一緒なんだ！？」

東郷
「秋山の代役」

宮澤・マーリン
（（言ってのけたよ、この人））

宇垣
「むう、陛下の前だ、粗相の無い様にな」

東郷
「はっはっは、大丈夫ですよ」

宮澤
（…君については何も言われなかったね？）

マーリン
（やっぱり、これだからかな？）

ヒソヒソと呟きながら軍服を摘まむ。

帝
「皆さ～ん、御前会議ですよ～」

ズルッ！

余りに間延びした声で入って来た帝に2人が滑る。

帝

「あら、東郷。初めて見る顔が2つもありますね？」

東郷

「秋山参謀長の代役でございます」

帝

「あら～、そうですか～、では、御二人の…」

「帝、政務が先です」

後ろからキツめの言葉を掛けたのは女官長のハルさん。

家政婦の服装に三角眼鏡、右手のはたきが特徴な女官長である。

帝

「む～、わかってます…本日はガメリカより書状が届いています」

山下

「書状？」

帝

「え～と、内容はですね…」

ガメリカから送られてきた書状は『安全保障条約』の提案と条件だ

った……が内容は『安全保障』の名を借りた『属国化』であった。
つまり、軍隊を解散して、領内統治権を譲渡し、属国になれと言う話だ。

宇垣
「ば、ば、ば、馬鹿な!?　こ、こんな条約などのめん!!」

山下
「まったくだ!　帝、もう我慢なりません!　ガメリカに宣戦布告を!」

蛸の様に顔が真っ赤になった宇垣長官と我慢の限界とばかりに宣戦布告を薦める山下長官。
帝は視線を東郷に向けた。
東郷は無言だった…しかし、帝は無言だから察した。

帝
「皆の意見は解りました。少し考えて来ます」

そう言うと奥へと引っ込んだ。

次号へ

１６　開戦への足音　上（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

17　開戦への足音　下

皇居

帝が奥に引っ込んでから３０分が経過した。

東郷
「…しかし、２人は驚きもしなかったな」

宮澤
「…なんででしょうかね？」

マーリン
「むしろ、普通でいたよね？」

東郷
「いつか2人は大物になるぞ」

宮澤
「間違っても東郷先輩みたいな大物にはなりたくありませんね」

東郷
「…どう言う意味だ？」

宮澤
「いえ、別に…」

山下

「……随分、時間が掛かっておられる」

宇垣
「それだけ悩んでおられるのだろう」

そりゃそうだ…国力的に圧倒的優位に有るガメリカに挑むかどうかの決断である……悩むのは当たり前だ。

山下
「……ダメだ、このままでは埒が明かん！　帝の様子を見て来る！」

宇垣
「ま、待て山下！　いくらなんでもそれは…」

山下
「ええい！　離せ、宇垣殿！」

宮澤
「…止めなくていいんですか？」

東郷
「大丈夫だ、帝が出て来れば自然と収まる」

宮澤
「まあ、そうですけど…」

問題は何時出て来るかと言う事なんですが……。

帝
「皆さん、お待たせ致しました」

噂をすれば影…の如く帝が現れた。

帝
「ガメリカの安全保障条約ですが…到底受け入れられる物ではありません。よって、我が国はこれを拒否すると共にガメリカに対し宣戦を布告します」

山下・宇垣
「「ははー！」」

帝
「…ですが、果たして我が方に勝算はあるんでしょうか？」

……普通、そっちを先に考えないといけないのでは？…と宮澤もマーリンも思ったが口には出さない。

山下・宇垣
「「……」」

そして…肝心の2人は何故か沈黙……いやいやいや、ダメだろう。

東郷
「ガメリカの国力を考えますと態勢の整う前に決定的打撃を与える必要があります。つまり、短期戦で対抗するしかありません。ですが、あえて長期戦を狙うのであれば別の道があります」

帝
「…どう言う事ですか、東郷？」

東郷
「それの説明は…宮澤少将が致します」

宮澤
（……こう言うオチか）
実は面倒事を押し付ける為に…つまり、生け贄だったのではないかと内心思いながら発言した。

宮澤
「我が国は中帝国の資源を手に入れたとは言え、ガメリカの前には足りません。しかも、エイリアス帝国とも戦う事にもなり、多数の艦艇が必要となるのは明らかでしょう。つまり、資源が足りなくなります」

山下
「それはそうだが…何が言いたいのだ？」

宮澤
「どうせエイリアスとも戦う事になります。資源確保の為、マレーの虎以西…ベトナム、インドカレーを取り、必要とあればアラビア・アフリカ星海域も我が方の物にします」

山下
「な…アフリカやアラビアだと！？　いくらなんでも遠いぞ！？」

宮澤
「無論、一気にそこまでは行きません。最低限、インドカレー星域まで確保し、シーレーン確保及び治安回復に勤め、資源と国力を確保します。それとも、他に案でも？」

山下
「い、いや…うむ…」

宇垣
「だ、だが、そう簡単に上手くいくのか？」

マーリン
「いきます。何故なら、エイリアス帝国は各星域に爆弾を抱えているからです」

帝
「爆弾？　それはどう言う事ですか？」

マーリン
「各星域の総督や貴族は支配星域において過剰な搾取により、私腹を肥やしています。また、その為にセーラ陛下のエイリアス帝国軍と総督・貴族間に摩擦が有り、付け入る隙は有ります」

宇垣
「むむ、エイリアス帝国にそんな弱点が…」

山下
「ちょ、ちょっと待ってくれ！　なぜ、貴女がそんな内部事情を知っているのだ？　まるで見ていたかの様に！？」

マーリン
「当たり前です。私は数年前までその光景を幾度も見ていましたから」

すんなりと答えたマーリン、驚きの余り口を開けて呆然とする山下長官。

帝
「…まあ、勝機がある事は間違いありません。我が国は一週間後宣戦布告します。皆さんは各部署との連絡を満つにして下さい」

3人
「「「はは－！」」」

山下
「おい、宮澤少将！」

帰ろうとする東郷達に山下長官が声を掛けて来た。

東郷・宮澤
「お、利古里ちゃ…「東郷先輩、マーリンを連れて先に行ってて下さい」…はいはい」

宮澤に言葉を遮られ、大人しく引き下がる東郷長官。

山下・宮澤
「宮澤少将、彼女が「マーリンです」…マーリンがエイリアス貴族と言うのは本当なのか！？」

あぁ～、やっぱり訊きに来たか。

宮澤

「えぇ、本人も認めたでしょう？」

山下
「む…そうだが…では、なぜ、その彼女がここにいるのだ！？」

宮澤
「……山下長官なら言ってもいいかな…彼女は４年前、目の前で両親を腐敗貴族達の策謀による爆弾テロで亡くしているんですよ」

山下
「な…あ……」

余りの事に言葉が出なくなった山下長官。

宮澤
「でも、マーリンはエイリアス帝国自身を恨んでる訳ではありませんよ。現エイリアス帝国女王セーラ・ブリテン陛下を『セーラ陛下』と言っていますからね」

山下
「むぅ…その発言は余計だ…だが、そんな過去を抱えていたか…いや、訊いて済まなかった」

宮澤
「あ、い、いえ、そんな事は…」

素直に謝った山下に今度は宮澤が驚く。

山下
「…どうした？」

宮澤
「い、いえ、この前のお礼といい、今回といい、山下長官って案外良い人なんだな～と…」

山下
「…まるで私が悪い人間の様に聞こえたのは気のせいか？」

腰の軍刀に手を延ばす山下に宮澤が慌てた。

宮澤
「あ、そ、そう言う事では無くて…ほら、山下長官は堅いイメージが有りますし…それに最近、ピリピリしているから…」

山下
「…ふむ、そうか…やはりか…」

宮澤
「…どうかしましたか？」

山下
「あ、いや…長く引き留めて済まなかった」

身を翻すと手を振りながら山下長官は去って行った。

次号へ

１７　開戦への足音　下（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

18　作戦会議

それから5日後……

東郷
「…と言う事で提督の一員に加わってもらう柴神様だ」

柴神様
「よろしく頼む」

……帝に呼ばれて出向いていた東郷長官が帰って来たとたん、この状況。

秋山
「では、柴神様に対し粗相の無い様にしなくては…」

…秋山先輩、あなたも慣れましたね…。

真希
「あ、ワンちゃんだ～♪」

純粋過ぎてツッコミも躊躇してしまう真希ちゃんの呟き。

真希
「ワンちゃん、お手」

柴神様
「ワン♪」

真希ちゃんの……ん？

宮澤
「……柴神様？」

柴神様
「はっ！　ついつい童心の頃に返ってしまった！」

マーリン
「…童心って…」

……結論、柴神様は案外人懐っこい（特に真希ちゃんみたいな子供）神様である。

宮澤
「…って、東郷長官！　話の始まりがおかしいでしょう！？」

東郷
「はっはっは、気にするな」

秋山
「長官、笑って誤魔化さないで下さい」

……ちなみにここは海軍司令部の会議室。
柴神様を加えた提督達（各艦隊参謀、あるいは副官も参加している）が集まっていた。

田中
「んな事はどうでもいいから、さっさと方針言えよ、方針を」

宮澤
「そうでした…コホン、我々は先ず宣戦布告翌日にミクロネシア星域を、次にマニラ２０００、その次にマレーの虎、四国、ラバウルを攻略します」

スクリーンに映し出された星域図を指し棒で指しながら話を進める。

田中
「おいおい、宣戦布告の翌日だぁ？　ガメリカ野郎が待ち構えているところに突っ込む気か！？」

宮澤
「…怖いですか？」

田中
「何だと！！　もういっぺん言ってみやがれ！！」

山本
「餓鬼は黙っとけって…若僧、何か計算があるんだろう？」

宮澤
「山本提督の言われる通りです。宣戦布告直後なら『奇襲で殺られた』で済みます。ですが、その翌日となれば…」

南雲
「『奇襲で殺られた』なんて言い訳は通用しないって訳だねぇ？」

宮澤
「はい、通常戦闘で勝ち続ければガメリカ国内で反戦気運を高める事になります。田中提督も弱い敵より、強い敵にブッ放したいでしょう？」

田中
「当たり前だ」

ムスッとしながら田中が言った。

宮澤
「なら、奇襲で萎れた花火みたいな敵に勝って満足ですか？　強い敵が抗戦するほど田中提督の艦隊は2倍も3倍もブッ放せると思いますが？」

田中
「……そうか！！　確かにそうだな！！」

東郷
（…俺より田中の扱いに慣れてるのは気のせいか？）

秋山
（ここのところ、田中提督と演習ばかりしていましたからね）

ひそひそと東郷と秋山が話していた。

宮澤
「当面の方針は以上の通りです。最初は体勢の整っている我が方が優位ですが、もたもたしている暇も有りませんが…まあ、気楽にやりましょう」

笑いながら言った

暫くして……陸奥艦橋

宮澤
「…と言う訳で最初の攻略場所はミクロネシア星域だ」

木村
「ハワイ星域からの直通コースか…で、次にマニラ２０００、ラバウル経由の間接コースだな」

新井
「二ヶ所一気に…と言うのはやっぱり無理ですか？」

マーリン
「戦力上の事を考えると難しいわね。各個撃破されたら事だし…防衛や予備も考えたら、こっちがベストなのよ」

本間
「まあ、私達は行って敵を叩けばいいのよ」

最上
「あ～あ、当分忙しいよ～～、アキバ行けないよ～～」

宮澤・マーリン・木村・本間・新井
「「「「「我慢しろ！」」」」」

最上
「ちぇ～」
一斉にツッコミを入れられてふて腐る最上。

新井
「ですが…当分は休み無しですね」

木村
「いや、それは仕方ないけどさ…提督の数が足りるのか？」

宮澤
「…正直言って足りてない。だから、使えそうな奴を引っ張ってきて提督にするそうだ」

木村
「…そんなんで大丈夫なのか？」

宮澤
「満州宙域で負けた時点で大丈夫なんて言葉は消えたよ」

木村
「……確かに」

次号へ

１８　作戦会議（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

１９　マクロネシア星域攻略戦（前書き）

すみません……意外に長くなってしまい、更新が遅れました。

19　マクロネシア星域攻略戦

3日後……ミクロネシア星域　ワープゲート前

新井
「ワープ完了。ガメリカのミクロネシア星域です」

宮澤
「……いよいよだな」

昨日、日本帝国はガメリカ共和国に宣戦布告…自動的にエイリス帝国、オフランス王国にも宣戦布告がなされた。
そして……1日経ってからガメリカの星域に侵入した。

ビー！ビー！ビー！

マーリン
「早速お出迎えよ！　前方にミクロネシア星域のガメリカ艦隊！」

宮澤
「最上、他の艦隊は！？」

最上
「東郷長官の長門以下、作戦参加艦艇は全艦ワープ完了！」

宮澤
「本間、木村、第4艦隊全艦戦闘用意！」

本間・木村
「「了解！」」
忙しくなった艦橋で宮澤は深呼吸をする。

……ここで新造艦の配備もあったので第４艦隊の編成を紹介。
戦艦　陸奥・筑波・生駒（陸奥以外は５０式戦艦）
巡洋艦　天龍・久慈（くじ）・高瀬（たかせ）・加治（かじ）（全て５０式巡洋艦）
駆逐艦　３２隻（全て５０式駆逐艦）
……と言った具合である。

その頃……ガメリカ艦隊旗艦インディアナポリス
オペレーター
「敵艦隊接近！　およそ七個艦隊！」

「ふん、ジャップのフニャチン野郎にあたいの力を見せてやるよ！」
インディアナポリスの艦橋に陣取っているのはガメリカ軍提督のキャシー・ブラッドレイ提督。
ガメリカ軍ではそのじゃじゃ馬ぶりが有名で、ギャル以上の化粧、

服装なんかラフなんて問題では無い服装なもんだから（ヒュン）ガン！

ブラッドレイ
「要らない説明しなくていいんだよ、作者！　さて、楽しませてもらおうじゃないか」

陸奥艦橋

木村
「艦隊全艦、戦闘準備完了」

本間
「陸奥、戦闘準備完了」

宮澤
「最上、他の艦隊は？」

最上
「東郷長官、柴神様、山本提督、南雲提督、田中のヤンキー、外道の小澤…全艦隊、戦闘準備完了」

マーリン
「（本当に小澤さんが嫌いなのね）艦隊司令」

宮澤
「（まったくだ）うむ…全艦全砲門開け！　砲撃開始！！」

新井
「てぇー！！」

ズビューウ！ズビューウ！ズビューウ！ズビューウ！ズビューウ！ズビューウ！ズビューウ！ズビューウ！ズビューウ！ズビューウ！ズビューウ！ズビューウ！

宮澤の命令が合図であったかの如く、第４艦隊だけでは無く、他の艦隊も一斉に砲撃を開始した。

チカッ！

ボーン！ボーン！ボーン！ボーン！ボーン！ボーン！ボーン！ボーン！ボーン！ボーン！ボーン！ボーン！

発射されたビームは展開していたガメリカ軍艦艇に突き刺さり、次々に火球へと変えてしまう。

木村
「おいおい、こう言う場合は艦隊の一斉射から始まる物だぜ？　ガメリカ艦隊の回避行動が散漫だぞ？」

新井
「仕方ありません。今までの射程距離の２割増しの場所から撃ってますから」

宮澤
「…本当に射程が延びたんだな」

マーリン
「それに命中率も上昇しているわ」

…津波さんが色々と弄ったと言うのは本当の様だ。

最上
「司令、東郷長官からです。南雲提督と……小澤と共に敵旗艦艦隊を攻撃せよとの事」

宮澤
「（おいおい…）東郷長官達は後衛の艦隊を攻撃する気か……まあ、いいか。第４艦隊全艦、我に続け」

再び……インディアナポリス艦橋

オペレーター
「敵艦隊の一斉砲撃により、戦力の２０％が撃沈！　３０％が損傷！」

ブラッドレイ
「ちっ、キツい始まりだね！」

日本側の一斉砲撃を受け、インディアナポリスも被弾していた。

オペレーター
「敵艦隊が二手に分かれました！　それと本艦隊に接近する艦隊の先頭にはナガト型戦艦がおります！」

ブラッドレイ

「敵の大将かい？　なら、やっちまえ！」

副官
「ファイヤー！！」

新井
「敵艦隊の砲撃です！！」

宮澤
「艦隊回避運動！！　田中提督と訓練した時と同様だ！！」

本間
「取り舵１２！　回避後砲戦用意！」

マーリン
「くるわよ！　対衝撃！」

ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！

一番前に居るだけに艦橋の直ぐ脇をビームの細長い光体が通り過ぎる。

新井
「全弾…回避完了」

宮澤
「全艦無事か？」

木村
「あぁ、無事だ」

本間
「進路戻せ。砲撃よろしいか？」

宮澤
「うむ、撃て」

本間
「撃て！」

ブラッドレイ
「な…全部回避した！？」

ブラッドレイ艦隊が放った砲撃は一発も当たらず、全て敵艦隊の後ろ抜けてしまった。

オペレーター
「て、敵艦隊の砲撃…また来ます！！」

ドガーン！ドガーン！ドガーン！ドガーン！ズーン！ズーン！ズーン！ズーン！ズーン！ドガーン！ドガーン！ドガーン！

ブラッドレイ
「くっ…被害は！？」

オペレーター
「か、艦隊の大半が撃沈されました…」

ブラッドレイ
「な…どれだけジャップの砲撃は正確なんだよ!?」

果たして自分達はこれ程正確だろうか…とブラッドレイ提督が思っている内に……

副官
「あ！　ナガト型が正面から…！！」

ブラッドレイ
「な…」

ガガガーーン！！

……強硬接舷した陸奥は陸戦隊を送り込み、インディアナポリスを制圧していった。
そして、艦橋へ……

新井
「おりゃあ！　全員銃を棄てて投降しろ！！」

木村
「バカ！　艦橋に飛び込む奴が居るか！！」

ヒューン！

首根っこを捕まれて新井が引っくり返った瞬間、銃弾が飛んできた。

ブラッドレイ
「お断りだね！　あたいに喧嘩を売った事を後悔しな！！」

木村
「ち、応戦！　応戦しろ！」

ズドドドドド！
ズドドドドド！
ズダダダダダ！
ズダダダダダ！

お互いに艦橋を巡り激しい銃撃戦を展開する。

マーリン
「ちょっと、あんた達！　なんで苦戦してるの！？」

新井
「マーリンさん…」

木村
「げ、なんでお前がここに居るんだよ！？」

マーリン
「苦戦してるって聞いたから、急いでこっちに来たの……あの変な化粧のガメリカギャルに苦戦してたの？」

新井
「え、えぇ、まぁ…」

マーリン
「じゃあ、私に任せて。援護お願い！」

そう言うとマーリンは飛び出して行った。

木村
「あっ…くそ、自棄だ、撃て！！」

ズダダダダダダダ！
ズダダダダダダダ！
ズダダダダダダダ！
ズダダダダダダダ！

マーリンを援護すべく、援護射撃が始まる。

ブラッドレイ
「ん…な！？」

マーリン
「ちょっと、そこのガメリカギャル！　大人しく捕まりなさい！」

３０分後……陸奥艦橋

宮澤

「…で、掴み合いの喧嘩を展開した挙げ句、漸く捕まえたのね」

新井
「はい……」

……敵防衛艦隊を撃滅した日本艦隊は後始末をしていた。

宮澤
「で、相手の方は？」

新井
「マーリンさんと協力してなんとか営倉に放り込みました」

宮澤
「そっか…まあ、丁重にな」

新井
「はい」

次号へ

１９　マクロネシア星域攻略戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

20　マニラ2000攻略戦（前書き）

いや～…本当に戦いとなると文章が長くなる…。

最上

「作者～、私の活躍は何時～？」

……知るか。

２０　マニラ２０００攻略戦

３日後……マニラ２０００星域

ミクロネシア星域の確保を完了させた日本軍はマニラ２０００の攻略するため、ワープした。

陸奥艦橋

宮澤
「さて…ミクロネシアは上手くいったが、流石にマニラ２０００は解らんな」

実際、前方で待ってましたと言わんばかりに展開するガメリカ艦隊の防御線を見るだけでこう思う人間は居ないだろう。

マーリン
「あんなの、ただ艦を並べてるだけじゃない」

宮澤
「…君からそんな言葉が出るとは思わなかったよ」

素人感想なら未だしも、軍人が言うとツッコミどころ満載だ。

木村
「で、どうする？　情報部の話だと、司令はイーグル・ダグラスだぜ？」

本間
「うそ！？　あの俳優のイーグル・ダグラス！？」

新井
「本間先輩、ガメリカ映画に一時期ハマってましたからね」

最上
「ちなみに俳優は3年程前から休業中。軍に入って、今はガメリカ軍西海岸方面司令長官よ」

宮澤
「…よく知ってるな？　どっからだ？」

最上
「サイトのメ・ル・友♪」

マーリン
「……で、どうするの？」

宮澤
「……最上、長門に通信を繋いでくれ」

最上
「了解……どうぞ」

旗艦長門に繋がったスクリーン……しかし、東郷長官はスクリーンと反対側を向いていて、秋山参謀長は困り顔だった。
更に……

真希
『あ、みーちゃん！』

宮澤
「……あれ？　真希ちゃん？」
…本来なら居ない筈の真希ちゃんが居た。

東郷
『ん、宮澤か。どうした？』

宮澤
「え、あ、はい。ガメリカ艦隊に対する攻撃をどうするかお伺いしたかったんですが……なんで真希ちゃんが？」

秋山
『いつの間にか、長門に密航していましてね…』

秋山参謀長は正に「やれやれ」と言いたげに言った。

東郷
『今更戻る事も出来んし、このまま長門に乗せておく』

マーリン
「それはそれで大丈夫なんですか！？」

秋山
『既に私が言いましたよ…聞いてくれませんでしたが…』

宮澤・マーリン・木村・本間・最上・新井

「「「「「「あぁ～……」」」」」」

……真希ちゃんに関しては梃子でも動かないからね…。

宮澤

「…では、話を戻しましょうか」

結局、右翼を山本・南雲艦隊、中央を東郷長官・柴神様・小沢艦隊、左翼を宮澤・田中艦隊が担当する事となった。

新井

「田中艦隊と組んじゃうんですね」

宮澤

「おいおい…仕方ないだろう。連係的に慣れているんだからさ」

最上

「……ん、司令、ガメリカ艦隊の通信をキャッチ」

宮澤

「通信？　暢気に世間話か？」

最上

「ん～…ぽいわね。ついでに言うと周波数は一般会話用、どうやら現地軍同士の会話ね」

宮澤

「現地軍か……通信と周波数から左翼の艦隊から現地軍の艦艇を洗

い出せないか？」

最上
「やってみるわ。新井、手伝って」

新井
「わかりました」

マーリン
「どうするの？」

宮澤
「それはお楽しみさ」

最上
「…はい、識別完了。出すわよ」

スクリーンに映し出されていたレーダー画面のガメリカ左翼艦隊が白と赤に分けられた。

最上
「白は現地軍。赤がガメリカ西海岸艦隊ね」

木村
「おい、赤より白が多いぞ！？」

本間
「なら、数的主力は現地軍ね」

宮澤
「やっぱり…このデータを第４艦隊全艦と田中艦隊に転送、現地軍は狙いから外し、ガメリカ艦隊のみを攻撃する」

新井
「あぁ、なるほど」

最上
「田中のヤンキーから早速通信、繋ぎます」

画面が変わり、田中提督が映った。

田中
『おい、さっき転送されてきたデータはなんなんだ！？』

宮澤
「白と赤の意味は解りました？　白は現地軍、赤がガメリカ艦隊、そして、赤の中に最も大きな反応を攻撃すればわかりますよ。白は攻撃しない様に、では」

一方的説明後に通信をきった。
今までだったら、再度説明を促す通信が入ってきたが、今回は何もなかった。

マーリン
「ちゃんと理解出来たみたいね」

宮澤
「…多分ね」

新井
「先輩、戦闘開始です！」

宮澤
「よし、主力艦隊が相手だ、派手にやれ！」

木村
「てぇー！！」

ズビューン！ズビューン！ズビューン！ズビューン！ズビューン！
ズビューン！ズビューン！ズビューン！ズビューン！ズビューン！

日本艦隊が一斉射撃を開始し、戦いの火蓋を切った。
対しガメリカ艦隊は……何故か動きが鈍い。
そんな事を気にする暇も無く……

新井
「田中艦隊、突入します！」

宮澤
「…少し早いが…第４艦隊前進！　敵左翼艦隊を撃ち破る！」

本間
「前部砲塔射撃続行、後部砲塔射撃用意！」

田中艦隊への援護射撃を続けながら第４艦隊も前進を続ける。

マーリン
「敵大型艦撃沈！　田中艦隊の攻撃が成功したわ！」

レーダースクリーンを凝視していたマーリンが叫ぶ。
宮澤
「最上！」
最上
「次席旗艦ね！　既に特定済みよ！　表示するわ！」
あっという間にレーダースクリーンに次席旗艦がマーキングされた。
宮澤
「筑波・生駒に連絡。三隻の一斉射撃で仕留める！」
本間
「了解……照準リンク完了！　てぇー！！」
ズビューン！ズビューン！ズビューン！ズビューン！ズビューン！
ズビューン！
戦艦３隻の集中ピンポイント射撃に次席旗艦も爆沈した。
宮澤
「よし…第４艦隊全艦突撃！！」
新井
「了解……あ！　先輩！　広域レーダーに微弱反応！　旗艦長門の進路上に機雷です！」
宮澤
「なぁ…長門に…」
チカッ！

ドーーン！！！

突如の閃光、そして爆発……それは長門の方向からだった。

宮澤
「長門に繋げ！！」

最上
「は、はい！」

最上が大慌てで長門に通信を繋いだ。

宮澤
「東郷先輩！！」

東郷
『よう、どうした？』

ズルッ

……何も無かったかの様に普通に訊いてきた東郷長官に、宮澤は滑りかけた己を何とか止めた。

木村
「…東郷先輩、機雷は大丈夫だったんですか？」

秋山
『真希ちゃんのお陰で無事ですよ』

代わりに答えた秋山参謀長。
見ると、後ろにまるでバリア発生装置の様にバリアを展開している真希ちゃんが居た。

マーリン
「……え、え、え～！！？　東郷長官！　それって…」
東郷
『話は後だ。今はガメリカ艦隊を撃滅しろ』

プツン

新井
「……切れちゃいましたね」

最上
「……それより…あれって…」

本間
「……どうするの、司令？」

宮澤
「……まあ、長門は無事だったし……とにかく、ガメリカ艦隊を追っ払おう」

そして……第４艦隊は攻撃を再開した。

数時間後……マニラ２０００～ラバウルのワープゲート前

被弾し、ボロボロになったガメリカ艦隊の残存艦がワープゲートに辿り着いた。
その中に旗艦のコロラドもいた。

ダグラス
「…何隻だ？」

士官
「１０隻…です」

意気消沈した声で士官が答えた。

ダグラス
「くそ…上の奴等、勝手に防衛線を弄りやがって…」

それが初動の鈍りに繋がった……無論、それだけで無く、敵の砲撃が正確だったり、味方の対応が鈍かったり……自らのミスも挙げればキリがない。
しかし……特に左翼艦隊の旗艦アリゾナがさっさと轟沈し、次席旗艦のペンシルバニアが敵の集中射撃でたちまち轟沈、左翼艦隊が大混乱に陥り、そのまま中央・右翼艦隊が喰い破られたのが敗北への流れ決めてしまった。
しかも、左翼艦隊旗艦・次席旗艦が僅か１０分間で成し遂げられたのである。

ダグラス
「…日本艦隊の長官はトーゴーだが…左翼艦隊から俺達を喰い破った艦隊と提督は解るか？」

士官
「開戦前の情報部からの情報ですと、トーゴーの古巣で第４艦隊、今の提督はミヤザワと言う若い提督だと言う事でしたが…」

ダグラス
「そうか…ありがとうよ」

その後、イーグル・ダグラスを乗せたコロラドは残存艦を率いてワープした。
なお、マニラ２０００が占領されたのは翌日の事だった。

次号へ

２０　マニラ２０００攻略戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

21　日本化案＋提督フラグ1（前書き）

微妙にオリジナルになっています。
まあ、筋は通しているかと……。

２１　日本化案＋提督フラグ１

２日後……マニラ２０００星域

陸奥艦橋

マーリン
「まあ、予想はしてたけど…バカっているのね」

宮澤
「君も毒舌だね」

陸奥の艦橋で話す２人……占領が完了したマニラ２０００星域で陸奥を始めとした第４艦隊がいた。
無論、マニラ２０００の守備任務であるが……今はそんな事では無かった。
ガメリカとの関係で利潤や利益のあった人間が、日本の占領により無くなる事を阻止するため、反乱をおこした。
それを鎮圧するため、第４艦隊とリンファ・ランファの艦隊が展開していた。

新井
「反乱部隊を探知…どうします？」

宮澤
「先ずは二回、警告と投降を促す…それで無理なら鎮圧する。それだけだ」

最上
「司令、残念ながらそれは無理よ。て…反乱部隊接近！」

マーリン
「…エイリスの貴族並みね。利益に群がろうとする根性は」

宮澤
「……仕方ない。掃討せよ」

木村
「了解、撃て！」

……2日後　皇居

……マニラ２０００での反乱鎮圧を終えた第４艦隊司令の宮澤と参謀のマーリンが何故か呼ばれた。
しかも、今回は柴神様の太鼓判付きで……。

宮澤
「…人物保証をされたって事ですかね？　これ？」

東郷
「まあ、柴神様は人を見る目に関してはさすがに天下一品だからな。お前も信頼されたと言う事だろう」

東郷長官に同行し、皇居の廊下を歩きながら話す2人。

もちろん、マーリンも一緒だ。そんな事を話ながら謁見の間に入り、その後、やって来た帝に先日の反乱の報告を行った。
すると……

帝
「…わかりました！」

宮澤
「な、何がですか？」

帝
「今回の件でわかりました！　占領地を日本化して、日本を好きになってもらいましょう！」

……なんか、あってる様な、間違っている様な…微妙な雰囲気が……。

マーリン
「…なるほど、管理支配よりも、日本と一緒にしてしまおうって事ね…エリイスよりマシね」

宮澤
「いや、君が納得しても…」

宇垣
「帝…それは少し無茶かと…」

山下
「そうです。我が国にそれ程余裕が有る訳ではありません」

無論、宇垣さんと山下さんは反論する。
まあ、余裕が無い事は確かだし……。
帝は東郷長官を見る。本人は沈黙しているが、目は完全に「お前が言え」と言っている。

宮澤
「…まあ、余裕の無い事は確かですが、どちらにしろ、日本に慣れて頂きませんといけませんし…それに日本化案もここで総否決するのは早計かと…」

…つまり、決定は保留と言う事で。

宇垣
「む…そうだな」

山下
「…あぁ、それでいい」

帝
「…わかりました。占領地の治安回復、よろしくお願いします」

……と言う事で日本化案は保留となった。

暫くして……迎賓館

東郷長官に連れられ、迎賓館にやって来た。
現在、迎賓館は提督クラスの人間が捕虜になった時の居住地に成っ

ている。
そして、なんでそんな所に来たかと言うと……。

マーリン
「あのガメリカギャル、ちょっとは自分の状況を考えなさいよ」

宮澤
「いや、多分、考えてるとおもうよ」

……ミクロネシア星域で捕虜したキャシー・ブラッドレイ提督が暴れて手に負えないとあちこち傷と絆創膏だらけの担当士官が東郷長官の所に泣き付いて来た。
……と言う訳でここに居る。

ドンガラガッシャーン！！

東郷
「……これは凄いな」

宮澤・マーリン
「「……」」

……いったいどうすればこれほど部屋が荒れるのか？…と訊きたくなる部屋の荒れ様だ。

ブラッドレイ
「ん…なんだい？」

東郷
「いや、君の様子を見に来ただけだよ。キャシー・ブラッドレイ提

督」

ブラッドレイ
「あぁ、あんたがボスのトーゴーかい？　普通の男だね」

……まあ、見た目ね。

東郷
「さて…君には我々と一緒に戦って欲しいと言いに来たんだが…何かご不満でもあるのかな？」

ブラッドレイ
「一緒に？　ご不満？　それならあたいを満足させて欲しいね。もちろん、あっち方面で」

東郷
「なるほど……宮澤、マーリン、席を外してくれ。それと外の見張りも頼む」

宮澤
「…なんと説明すればいいですか？」

東郷
「そうだな…男と女の戦場になる…とでも言っといてくれ」

宮澤
「……わかりました」

顔を真っ赤にして固まったマーリンを引き摺りながら外に出た。
そして、見張りの兵士の任を解くと速足でマーリンを連れてその場

を立ち去った。

次号へ

21　日本化案＋提督フラグ１（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

22　イベント結果　1

翌日……海軍司令部

東郷長官に呼ばれた宮澤は司令部のドアまで来ていた。

プシューン

目の前で自動ドアが開き、男が1人出て来た。
男の方は気付かなかったが、宮澤は直ぐに男が誰だかわかった。

宮澤
「東郷長官、さっきのは平良英知（たいらえいち）少将では？」

東郷
「あぁ、病気静養中だったが、回復したんで戻って来たんだと」

宮澤
「……そうですか」

平良英知少将…29歳、東郷長官に並ぶ秀才で次期海軍長官候補だったが、最近は病気静養中で海軍には不在状態だった。
しかも、国内で有名な極右思想団体『愛国獅子団』のトップで、彼自身、外国人を毛嫌いする傾向がある事は有名だった。

秋山
「君の心配は解りますが、邪険にしないで下さいね」

宮澤
「…わかってりますよ」

平賀所長の部屋

宮澤
「失礼しま～す」

ちょっと用事を頼まれ、平賀少将の所へやって来た宮澤。

平賀（久重）
「ん…あぁ、君か。何の用だ？」

宮澤
「いえ、これを渡してくれと東郷長官に言われたものですから」

そう言うと封筒を渡した。

平賀（久重）
「ん…あぁ、東郷長官には受け取ったと言っておいてくれ」

宮澤
「はい……訊きたい事があるんですが」

平賀（久重）
「……手短にな」

宮澤
「では…真希ちゃんの事ですが…」
平賀（久重）
「あの２人から聞いてないのか？」
宮澤
「訊けるわけないでしょう…特に本人には」
平賀（久重）
「…まったく…まあ、帝と同類…と言えば察しが付くだろう」
宮澤
「はい」
……多分、真希ちゃんは知っていただろう…本人は言わないだろうし、東郷先輩も知らなくて当然だ…。
宮澤
「ありがとうございます…失礼しました」
そう言って宮澤は退室した。
再び司令室
ブラッドレイ
「あ…と、トーゴー…居るかい？」

用事を終えて東郷長官の所に戻って来ていた。
そんなところにキャシー・ブラッドレイ提督が司令部に入って来た。
ただ……

宮澤
「……え～と、ブラッドレイ提督…ですよね？」

ブラッドレイ
「な、なんだよ！　あたいのどこかがおかしい！？」

秋山
「いえ、その…随分お変わりになられたかと…」

実際そうだ…最初見た時はピエロの様な化粧と髪の染め様だったのに…今は何処にでも居そうなスポーツ少女の様な『素顔』だった。

東郷
「やあ、キャシー。どうした？」

ブラッドレイ
「あ…ほら、この前の提督の件だけどさ…別に良いかな～と思って…」

宮澤・秋山
（（いや…東郷（先輩・長官）に落とされたな…））

付き合いが長いのと、同じ様な例を何度も見てきただけに直ぐに察した。

東郷
「そうかそうか…宮澤、当分お前が預かれ」
宮澤
「え！？　いきなりですか！？」
東郷
「編成は巡洋艦2個戦隊に駆逐艦1個だ。よろしく頼むぞ、秋山」
秋山
「……わかりました」
胃の辺りを抑えながら答えた。
ブラッドレイ
「あぁ…まあ…よろしく…」
宮澤
「……よろしく」
頭を抑えながら絞りだ出すかの様な声で応えた。
暫くして……陸奥艦橋
宮澤
「つー訳で…うちで預かる事になったブラッドレイ提督だ」

ブラッドレイ
「よろしく～」
…東郷長官でのしおらしい態度とうって変わって、非常にサバサバした態度で挨拶した。
全員
「「「「「「……」」」」」」
沈黙と言うか、唖然と言うか…とにかく何も言わない第４艦隊の面々。
宮澤
「…頼むから、何か言ってくれ」
マーリン
「えっと…凄い変わり様ね…」
木村
「あの派手な化粧を落としたら……こうなるんだ」
新井
「…驚きの素顔です」
本間
「うん……びっくり…」
最上
「司令！　今すぐ主計科に行って来て…」

宮澤
「ダメ！」

ブラッドレイ
「……1人を除いてだけど、けなされた？」

宮澤
「君の姿が変わり過ぎなの」

果たしてこれで大丈夫だろうか？……そう思うしか無い宮澤だった。

次号へ

22　イベント結果　1（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

23　三国同盟＋提督加入＋オリジナルイベント

数日後……皇居

宇垣
「…と言う訳でドクツ・イタリンとの同盟を推薦致します」

……いきなりで訳も解らない人もいるので解説すると、外務長官の宇垣さんがドクツ・イタリンとを回り、俗に言う『三国同盟』を提案してきた。
ただ……宇垣長官の顔が明らかに弛んでいるが。

山下
「私は反対だ。ファンシズムなど好かん！」

……山下長官、言いたい事は解りますが、それで決めてもらっては困りますが……。

帝
「う～ん…東郷はどう思いますか？」

東郷
「私は賛成です」

山下
「東郷！！　貴様は…」

東郷

「さすがに理由だけは聞いてくれるよね？　じゃあ、宮澤、頼む」

宮澤
「……はい。イタリンは置いて置くにして、ドクツはレーティア・アドルフ総統による高い技術力は我が国にとっても魅力的です。ですから、同盟には賛成です」

言い終わった後、マーリンが宮澤を小突いた。

マーリン
（なんか、東郷長官って敢えて話を振ってない）

宮澤
（多分、山下長官と波風立てない為だよ…微妙だけど）

まあ、実際は宮澤が意見言うと山下長官はあまり噛み付かないが…。

帝
「では、三国同盟は承認しますね。宇垣、後の事は頼みましたよ」

宇垣
「ははー！」

…宇垣さん…顔が緩みまくってますよ……。

暫くして……海軍司令部

平良
「東郷長官」

東郷
「なんだ、平良少将？」

御前会議から戻り事務仕事をしていた東郷長官に平良英知将が近付いて来た。

平良
「いえ、この度私の従妹である福原いずみ中佐を紹介に上参っただけです」

「福原いずみです。閣下、もし他の方々に飽きましたら、どうぞ、私に声をお掛けくださいませ」

福原がこんな事を言っても東郷は相変わらず書類に目を向けていた。

東郷
「平良少将、上手く仕込んだな」

平良
「はあ…何の事ですかな？」

東郷
「ふっ…わかった」

平良
「…それでは」

そう言うと平良少将は福原を連れて司令部から出て行った。

宮澤
「あの野郎…後ろからぶん殴ればよかった」

秋山
「あのね…騒ぎをおこしてどうするの？」

机の下から出て来た宮澤の言葉に秋山参謀が呆れながら訊いた。

宮澤
「あいつからは危険な臭いがするんですよ？　放っておけと？」

東郷
「今はあまり刺激するな。それに確かいずみはお前の後輩だったよな？」

宮澤
「あの容姿ですから、男女共に人気がありましたね…平良少将に傾倒している事が珠に傷なんですが…」

秋山
「…よく見ていますね」

宮澤
「……ついつい人を見てしまうんです」

東郷
「まあ、実際には人が足りないからな…当分は我慢しろよ」

宮澤
「……わかりました」

宮澤
「ふう…ん？」

ドックに向かう途中の体育館の前で足を止めた宮澤。
見ると体育館の中が騒がしい。

宮澤
「…なにしてんだ？」

新井
「あ、宮澤先輩。それが先輩方と同期生達がバスケ勝負を木村先輩達に挑んだんですが…」

マーリン
「…まあ、あの様よ」

木村
「キャシー！　チャンス！」

ブラッドレイ
「オッケー！　それ！」

ヒューーウ……

スポッ

最上
『スリーポイントシュート！！　木村・キャシーの新コンビは最強で～す！！』

士官達
「「「「「「……」」」」」」

唖然とする同僚に漸く合点がいった。

宮澤
「…まさか、仕掛けた方が負けてるのか？」

マーリン
「そのとおり」

木村
「じゃあ、昼飯はそっちの奢りな」

ブラッドレイ
「逃げたら…後悔するよ」

士官達
「「「「「「「「ちきしょ～～～う」」」」」」」」

宮澤
「……仲いいな、おまえら」

木村・キャシー

「「いや～、久し振りにいい奴とバスケした（な・よ）」」

最上
「本当にいいコンビよね～。キャシー、今度あなたに合う服を選んであげるわ」

ブラッドレイ
「う…そ、それは勘弁して…」

宮澤
「最上、倫理的に止めろ」

マーリン
「…なんで？」

本間
「一回行けば解るから」

次号へ

23　三国同盟＋提督加入＋オリジナルイベント（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２４　ドクツ提督加入

一週間後……

東郷
「今日、ドクツからの派遣部隊が来るから付いて来い」

宮澤・マーリン
「「は、はぁ…」」

……ちょっと用事で東郷長官に会う為、海軍司令部に遣って来た宮澤・マーリンはその東郷長官と会ってこんな事を言われた。
しかし、ドクツからの派遣部隊も気になる為、付いて行くした。
ただ……

秋山
「…私が言うまで忘れていたのに…」

宮澤・マーリン
「「……」」

……秋山さん…色々あるんですね…。

艦船ドック

日本艦艇ばかりが入る艦船用ドックの一角に明らかに日本艦と形状の違う艦艇が占拠していた。

宮澤
「あの小型艦橋の国旗は…ドクツの物に間違いありませんね」

マーリン
「けど…あの艦だけ形状が違うわ」

同じ形状のドクツ艦艇の中から微妙に違う艦艇を見付けたマーリンが言った。

宮澤
「あれが…旗艦みたいですね」

秋山
「ドクツの進み様は聞いていましたが、まさかこれ程とは…」

旗艦とおぼしき艦艇に近付きながら秋山が呟いた。

ドクツ兵
「デーニッツ提督、５番区画のチェック終わりました」

「わかりました。次は機関室の３・４番区画のチェックをして下さい」

ドクツ兵
「はぁ…しかし、マニュアルには…」

「マニュアルは試運転時を参考にした物、現場では環境によって様々に変化します。機関音のリズムが少しズレていましたから」

ドクツ兵
「わ、わかりました！」

マーリン
「…どうやら責任者が見付かったわね」

チェックをしていたドクツ兵との会話で提督を見付けたが……

宮澤・マーリン
（（み、見えない…））

本人の前だから言わないが……幼く見えますが……

東郷
「やあ、そこにいたのか。日本海軍長官の東郷毅だ」

秋山
「…参謀長の秋山敬一郎です」

「総統の命により派遣されたエルミー・デーニッツです…挨拶はこちらからと…」

東郷
「なに、俺のわがままさ。それよりデーニッツ提督。君はいい瞳をしている。今度…」

宮澤
「オッホン…東郷先輩」

東郷
「…はいはい…そう言えば君の総統は技術開発から国政までこなしているそうだね？」

デーニッツ
「はい！　総統はとても素晴らしい方で…」

……暫くお待ち下さい……

4人
「「「「……」」」」

デーニッツ
「それで総統は……あ、すみません！」

東郷
「いや、謝る事は無い。少しだが、君の事はわかった。今度、出来たらデート…」

宮澤
「東郷長官…それ以上言うと秋山先輩に代わり、私が止めますよ？」

東郷
「はっはっは…では、デーニッツ提督は宮澤、お前に預ける事にする」

宮澤
「な！？　そう言って５日前も…逃げんな！！！！」
いつの間にやらドックから出て行った東郷を見ながら虚しい叫び声を上げる宮澤。

デーニッツ
「……大丈夫なんでしょうか…この国は…」

マーリン
「あの長官は女の子に目が無いだけだから…あなたが配備される第４艦隊参謀のマーリンよ、最初は日本の事が何も解らなくて怖いかもしれないけど、よろしくね」

デーニッツ
「ふえ！？　な、なんで…」

心中で思っていた事を見透かされて驚くデーニッツ提督。

マーリン
「まあ、最初は私もそうだったから……さて、艦隊旗艦へ挨拶にいきましょう」

宮澤
「そうだな。明日にはマニラ２０００に移動だし」

デーニッツ
「作戦ですか？」

マーリン
「ううん、ちょっとしたイベントよ」

陸奥艦橋

宮澤
「…と言うわけで第４艦隊に編入されたドクツからの派遣艦隊司令のデーニッツ提督だ。デーニッツ提督、あそこの一団が第４艦隊参謀達、その右に居るのが傘下の巡洋艦戦隊のブラッドレイ提督、向かいの左に居るのが…」

「ララー・マニィよ。元ガメリカ海軍提督…今は第４艦隊の駆逐艦戦隊の司令だけどね」

デーニッツ
「……あの…この艦隊って…」

マーリン
「ツッコミたいのは解るけど、今の第４艦隊は…まあ、簡単に言えばごちゃ混ぜね」

確かに……色んな意味でごちゃ混ぜである……うん。

最上
「マーリン、デーニッツ提督に何着るか訊いて～」

マーリン
「いや、デーニッツ提督に直接聞いたら？」

デーニッツ
「…何をですか？」

マーリン
「見ればわかるわ、行くわよ！」

宮澤
「やり過ぎない様にな～」

次号へ

２４　ドクツ提督加入（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

25　親睦会&海水浴（前書き）

いや～…まさか水着（女性物）の種類を調べる事になるとは…。

福本
「大変だな」

ウィ…。

25　親睦会&海水浴

２日後………マニラ２０００星域

あるビーチ

宮澤

「…と言う事で、親睦会を兼ねた海水浴を行います」

全員

「「「「「「「「「「おおう！！」」」」」」」」」」

デーニッツ

「…………」

……何故か気合いの入っている雄叫び（？）にデーニッツは沈黙しながら引いていた。

宮澤

「……じゃあ、法律に触れない程度で御勝手に」

そう言うと宮澤は「やれやれ」と言いたげに立ち去った。あとは「御勝手に」と言われた将兵達が遊び始めた。

木村

「やっぱり、ここは水泳でしょう」

ブラッドレイ

「じゃあ、ビーチバレーはその後で」

黄色のビキニ水着のブラッドレイと木村が水泳かビーチバレーかで話し合っていた。

本間
「やっぱり、地元の人間に任せて良かったわ。ありがとう、マニィ」

ララー
「ううん、こんな事なら私に任せてね」

最上
「うふふ…あっちを見ても、こっちを見ても水着の子ばかり…ジュルリ」

新井
「…最上先輩、涎が……聞いてないか」

今回の親睦会実行委員で白のローライズ水着を着た本間が穴場を知っていたマニィにお礼を言うその隣で各種水着を着た女の子達を、涎を垂らしながら眺める黒のスリングショット水着の最上…しかも、カメラを片手に。
ちなみに、水着は全て最上が用意した物……つまり、完璧な確信犯である。

デーニッツ
「…これ、親睦会ですか？」

白のワンピース水着のデーニッツは隣に居る宮澤・マーリンに聞いた。

宮澤

「親睦会ですよ。まあ、本人達遊びたいだけかもしれませんが」

マーリン
「何時までも訓練だと、皆参っちゃうしね～」

…どうやら、2人にとっては隠れた意図やら何やらは無視して、楽しければいいようだ。

デーニッツ
「日本人はもう少し真面目な人達と聞いていましたけど…」

宮澤
「真面目ですよ。ただ、遊びたい時は遊ぶんですよ。日本人も」

そう言うと宮澤は立ち上がり、準備運動をする。

宮澤
「ちょっとひと泳ぎしてくるよ。後を頼むよ」

マーリン
「えぇ、行ってらっしゃい」

黒のセパレーツ水着にサングラスを着けたマーリンが手を振りながら答えると宮澤は海に向かって走って行った。

デーニッツ
「…1つ訊いていいですか？」

マーリン
「なんで私が日本軍に居るか、でしょう？　何度も訊かれたから、

直ぐに解るわ」

デーニッツ
「……はい、ブラッドレイ提督やマニィ提督の理由は聞きました。ですが…エイリス人のあなたが何故いるかが…」

マーリン
「そうね…ドクツ軍人のあなたなら余計に気になるでしょうね。それはね……」

……回想中……

デーニッツ
「あ…え、えっと…す、すみません…」

マーリン
「ううん、もう慣れちゃった。それに今はこっちの生活が楽しいしね」

三角座りでヤシの木の下でデーニッツに向かって微笑むマーリン。

デーニッツ
「……次は因縁の地での戦いですね」

マーリン
「そうね…でも、いくら否定されても、貴族としての誇りと義務を忘れるつもりは無いわ」

新井
「マーリンさ～ん、デーニッツさ～ん、遊びましょ～よ～」
…気重な話だと知ってか知らずか、陽気な声で2人を誘う新井。

マーリン
「えぇ、いま行くわ…さて、デーニッツ、行くわよ！」

デーニッツ
「えぇ！　わ、私もですか？」

マーリン
「当たり前よ。行きましょう」

腕を掴むと丸で主人を引っ張る犬の様に駆け出して行った。

次号へ

25　親睦会&海水浴（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

26　マレーの虎星域攻略戦（前書き）

因縁の地での対決。

26　マレーの虎星域攻略戦

4日後……マレーの虎星域

陸奥艦橋

木村

「…遂に来たな。エイリス帝国の牙城マレーの虎に」

艦橋からマレー虎星域を見た木村がポツリと呟いた。

本間

「ここを落としたら、完璧にエイリスを敵に回すわね」

新井

「ですが、ここを落とさずして、我が帝国に未来はありません…やるしかないですよ」

まあ、遅かれ早かれエイリス帝国とは本格的にぶつかる事になるのだから…こうなれば早い方がいい。

最上

「マレーの虎星域からの放送電波を受信…聴きます、山下長官？」

……何故か今回は陸奥にお邪魔している山下長官。

どうやら、陸奥が（何の理由かは知らないが）気に入ったらしい。

山下

「…いや、いい」

宮澤
「で、なんて言ってるの？」

最上
「そうね…日本が１００個艦隊を待って来ても1年は耐えれる…とか、一個艦隊で全日本艦隊を殲滅できる…とか…まあ、完全に嘗められてますね」

山下
「ほう…我が国も嘗められたものだな（怒）」

嘗められた怒りに拳をわなわなと震わせ、今にも一撃叩き込みそうな山下長官。

マーリン
「そんなの、対外的・対内的謀略放送よ。実際、哨戒網すら無いんだから…パーシバル提督は今頃、日本軍より現地民からの摂取物を算盤計算しているでしょうね」

宮澤
「笑えない話だな…さて、うちらは敵防衛艦隊を突破して、陸軍を突入させる…これでいいですね、山下長官？」

山下
「あぁ、それでいい」

木村
「さて…マレーの虎エイリス駐留艦隊主力を一艦隊で相手にしろっ

て…キツいね～」

新井
「いや…実際の第４艦隊の編成は準４個艦隊編成ですが…」

提督４人と所属艦艇を一艦隊に押し込めばそんな数にもなる。

ビービービー！！

新井
「司令！　守備艦隊、大慌てで上がって来ましたよ！」

宮澤
「よし…第４艦隊全艦、敵中突破。作戦は打ち合わせ通りだ。ブラッドレイ提督、マニィ提督、デーニッツ提督、後はお任せしますよ」

ブラッドレイ
『任せな！』

マニィ
『はいは～い、任せて～』

デーニッツ
『お任せ下さい』

それぞれの返事と共に通信がきれた。

山下
「…大丈夫なのか？　あれで？」

宮澤
「まあ、共同戦闘は始めてですが、我々は何もバカンスばかりしていた訳ではないのでね……全艦、撃ち方始め」

マーリン
「撃て！！」

その頃……エイリス帝国東洋艦隊旗艦プリンス・オブ・ウェールズ艦橋

『パーシバル提督、だからあれほど…』

パーシバル
「そんな過去の事はどうでもいい！　早く応戦せよ！！」

現地軍提督ジャカルタの発言を強制停止させて攻撃命令を出すパーシバル提督。

ゴゴーン！　ゴゴーン！
ゴゴーン！　ゴゴーン！

パーシバル
「な、なんだ！？」

オペレーター
「こ、後方より攻撃！　何隻か撃沈されました！」

パーシバル
「う、後ろだと！？」

チカッ！

ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！

パーシバル
「こ、今度はなんだ！？」

オペレーター
「さ、左舷より巡洋艦主体、右舷から駆逐艦主体の艦隊が攻撃してきます！！」

直撃弾を受けた巡洋艦や駆逐艦が行き足を停めるか爆沈する。

パーシバル
「混乱するな！　こんな物は…」

ドゴーーン！！！

いきなりの爆発に誰もがそっちを見ると、隣にいた戦艦レパルスがスクラップ化していた。

オペレーター
「て、敵艦隊正面！！　せ、戦艦３隻を中心とした艦隊です！！」

パーシバル
「は…は、速い…速すぎる！」

ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！

グラグラグラグラ！

オペレーター
「敵鉄鋼弾命中！！」

パーシバル
「ダメージコントロールはどうした！？」

オペレーター
「…ダメです！　機関の損害甚大…他の箇所も被害が大きくダメコンが追い付けません！！」

パーシバル
「バ…バカな……退艦する！！　脱出だ！！」

陸奥艦橋

宮澤
「ここまで上手くいくとは思わなかったよ」

マーリン
「まあ、敵が出て来た直後だったしね」

ドクツ軍がマジノライン攻略に使った方法で敵東洋艦隊を叩きのめした第４艦隊…その効果は抜群だった。

新井
「先輩、付近の現地艦隊が次々と降伏しています」

宮澤
「よし、最上、全周波数でエイリス帝国東洋艦隊は壊滅、旗艦・副旗艦は撃沈した事を報せてくれ」

最上
「了解」

宮澤
「投降した現地艦隊はマニィとデーニッツに任せましょう。では、陸軍部隊を降ろしますね、山下長官？」

山下
「…え、あ、あぁ…よろしく頼む」

……ちなみにマレーの虎星域は翌日には占領が完了した。

次号へ

26　マレーの虎星域攻略戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

27　区切りと再会と（前書き）

まあ、色々あってこうなりました。

宮澤

「…色々ってなんだよ？」

色々なの。

27　区切りと再会と

2日後……マレーの虎星域

漸く落ち着いた主星マレーの虎で第4艦隊は1日だけの休暇を取っていた。
そして、宮澤とマーリンは一台のジープを借りてある街の道路を走っていた。
運転しているのは元現地軍提督で祖国解放同盟『ボルネオ』のリーダーのラスシャラ提督、助手席に宮澤、後部座席にマーリンの3人。
え、なんでいるかって？
それは……

ラスシャラ
「ここだ」

ジープを止めたラスシャラが言った。
そこは街の中ポツンとある更地だった。

ラスシャラ
「あの事件の後、邪魔だって言って店を壊して更地にしたんだ」

宮澤
「そうですか」

マーリン
「……」

ここに来た理由……それは5年前マーリンのご両親が亡くなった場所に花を手向ける為だ……マーリン本人の希望だった。
マーリンは大事そうに抱えていた花束を置いて、宮澤は持って来ていた線香を立てた。
そして、静かに黙祷。

マーリン
「……今も憶えてる…両親はここに居て……私が手を振ったら……振り返してくれて……そしたら……」

引き取った後に何度も聞いた『あの時』を呟くマーリン。
宮澤は一度マーリンの頭を撫でるとジープの所まで引き返した。

ラスシャラ
「…いいの、1人にして」

宮澤
「今は1人にする方がいいですよ」

こういった場合は余り部外者が入らない方がいいのだ。

宮澤
「それよりもラスシャラさん、無理しなくてもよかったんですよ？」

確かに昨日、ラスシャラに会った時に『亡くなった場所』までの案内を頼んだが、別に今日とも言っていないし、案内もボルネオメンバーの誰でもいいと言ったのだが、何故かリーダー自身が案内してくれると言う事になってしまった。

ラスシャラ

「…私も会う予定だった」

宮澤
「え？」

唐突な言葉に首を傾げる宮澤。

ラスシャラ
「あの日、アポ無しで会う予定だった。彼女の両親はここでも有名な人だったからね」

宮澤
「…なるほど、そう言う事ですか」

漸く今日の事について色々と合点がいった。

マーリン
「さて…行きましょう」

随分長く居たが、済んだらしくジープの方にやって来た。

宮澤
「じゃあ、（ドン）ん？」

「だ、誰ですか～？　こんな所に突っ立てるのは？」

……どうやら誰かとぶつかった様だ。

まあ、当然だろう…フードを深く被り過ぎて前が余り見えていない。

宮澤
「おやおや、これは失礼しまし…」

マーリン
「…メアリー？」

宮澤
「…メアリー？？」

「…お嬢様！？」

ラスシャラ
「…お嬢様？？」

マーリン
「メアリー！　メアリーじゃない！　なんでここにいるの！？」

「お嬢様こそ！　本国で発表ではお嬢様も死んだって…」

…なんだかある意味話がややこしくなりそうだ。

ラスシャラ
「……なに、これ？」

宮澤
「…私も知りません」

数時間後……陸奥艦橋

マーリン
「…と言う事で、幼少からの付き合いで、専属メイドのメアリーだ」

メアリー
「メアリーです。皆さま、よろしくお願いいたします」

……現場で再会したメアリーをとりあえず天城へと連れて帰って来たマーリンは宮澤やラスシャラ、他のメンバーに話した。

最上
「さすが本場エイリス帝国のメイド！　私の…」

バシーーーン！！！

木村・新井・本間・ブラッドレイ
「「「「余計な事をするな！」」」」

……4人のハリセンで最上は叩かれた。

宮澤
「…お前ら、何処に隠し持ってたんだ？」

ブラッドレイ
「ここ」

そう言って指差したのは何時もは物入れに使っている、コンソール下の空間にある段ボール箱。

マーリン
「それで…どうにかならない？」

宮澤
「う～ん…身分保証はいいとして…エイリス時代はメイド、うちらが来襲するまでの元の仕事が酒屋のウェイトレス…」

……となるとこれしかない。

宮澤
「わかった。メアリーは主計科関係のところに当たらせてみよう。いま約束できるのはそれくらいだな」

これが応えであった。

次号へ

27　区切りと再会と（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

ＳＳ２８　四国占領＋平賀津波のお願い（前書き）

平賀所長のイベントはオリジナルです。
どれに繋がるかは……後々に。

SS28　四国占領＋平賀津波のお願い

４日後……四国星域

陸奥を基幹とする第４艦隊は編成艦隊に休暇を出し、中心部隊を率いて四国星域に来ていた。

陸奥艦橋

木村
「しかし……なんで福原と一緒なんだ？」

艦橋の窓から隣で航行する福原いずみの艦隊を見ながら木村が呟いた。

新井
「仕方ないですよ。東郷長官が「四国攻略は第４艦隊と福原提督の艦隊に任せる」って言ったんですから」
ちなみに福原いずみ提督の艦隊は巡洋艦と駆逐艦を主体にしたバランス型の快速艦隊である。

本間
「まあ、平良と違うからいいけど、後ろから撃たれ無いようにしないとね」

無論、福原がそんな事をしない事は百も承知だが…。

メアリー
「皆さ～ん、お茶が入りましたよ～」

…結局、艦橋付き主計兵と言う事で配属されたメアリー。

最上
「うふふ、やっぱり本場エイリス帝国のメイドが入れたお茶は格別ね～」

マーリン
「手を出したら…消すわよ」

宮澤
「お前ら…頼むから止めてくれ」

手を出すのも、消すのも止めてくれ……。

新井
「そ、そう言えば、四国星域は僅か二個艦隊で攻略出来るんですか？」

新井は慌て話を変えようと攻略作戦の話を出す。

マーリン
「大丈夫よ。ここには僅かな守備戦力しかいないし、四国の総督は大半の時間を地上での大怪獣調査に費やしてるわ」

木村

「つまり、形骸化してるって事だな」

マーリン
「えぇ、そうよ。アボリ人達も何もしなければ温和な人達だしね。ガワタスガル・ビゥを操っているのもアボリ人だから、エイリス軍は使えないわ」

宮澤
「よし、最上、福原の旗艦阿賀野に通信を…」

最上
「既に繋いであるわ。どうぞ」

そう言った直後にスクリーンにいずみの顔が映った。

福原
『なんでしょうか、宮澤少将？』

宮澤
「うん、どうやら敵の防衛戦力は貧弱な様だからね。一気に突入して、叩きのめす。ちゃんと付いて来いよ」

福原
『わかりました』

返事の後に通信がきれた。

宮澤
「よーし、全艦発砲しつつ突撃！　行っけー！！」

本間
「機関最大、撃ち方始め！！」

……結局、日本艦隊の突撃を止める術の無い駐留軍はあっさりと降伏し、四国星域は日本の手に落ちた。

3日後……日本

平賀の部屋

宮澤
「平賀所長～、何の用ですか～？」

平賀（久重）
「あぁ、君か。なに、2つ程頼みたい事が有るだけだ」

そう言うと向き合っていたパソコンから目を離し、一枚の書類を差し出した。

平賀（久重）
「今度はその新型巡洋艦を使ってみてくれ。詳細な報告も頼む…あ、東郷くんの許可はとってあるからな」

宮澤
「はあ…それならいいですが…で、2つ目はなんです？」

平賀（久重）
「あぁ…ちょっと調べて来てほしい物がある」

宮澤
「出来る範囲内でやりますが……それは？」

平賀（久重）
「なに、今から提示する地域の資源のサンプルを採ってきてほしい。殆どが元エイリス帝国圏だからな」

宮澤
「なるほど、そう言う事ですか」

つまり、うちにマーリンが居るからって事が頼まれた理由の１つらしい。

平賀（久重）
「急ぎはしないが、出来るだけ早めに終わらせてくれ。そうしないと戦力化が遅れてしまう」

宮澤
「わかりました」

なんなのか？……と訊きたいところだが、話してくれそうに無いので、やめておいた。

次号へ

ＳＳ２８　四国占領＋平賀津波のお願い（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

２９　福原&デーニッツのオリジナルイベント

２日後……

海軍司令部内の一角

宮澤
「う～～ん……疲れるな～」

そう呟くと腕時計を見た。

宮澤
「ふむ、１５時４０分か……あと２０分、頑張るか」

そう呟くと再び書類処理を再開する。

コトッ

「粗茶ですが、どうぞ」

宮澤
「ありがとう、いずみ」

書類に目を落としながら、振り向かずに粗茶の湯飲みを置いた人物を言い当てた。

福原

「あら、私と解りましたか？」

宮澤
「その声で解らない人間はいないよ。君は人気が有るからね」

福原
「うふふ、嬉しいです」

宮澤
「それで、何の用だい？　東郷先輩を落とせないからって、俺を落としに来たのかい？」

書類に目を向けながら訊く宮澤。

福原
「閣下、東郷閣下にも申しましたが、閣下も何か誤解なさっているようです」

宮澤
「俺も誤解であってほしいと願っているよ。何時もね」

皮肉そうに宮澤は言った。

福原
「では、失礼いたします」

宮澤
「あぁ…お茶、ありがとう」

福原が出て行こうとする時に宮澤は礼を言った。

そして、出て行ってから暫くしたあとでポツリと呟いた。

宮澤
「福原…あいつのせいで身を滅ぼさなければいいが…」

一抹の不安があった。

４時に仕事を終わらせた宮澤は一度部屋に戻り、マーリン、メアリーを連れて将校宿舎の廊下を歩いていた。
え？　なんでかって？
それは……

宮澤
「ところで、デーニッツ提督にアポイントはとったのか？」

マーリン
「ううん、とってないわよ」

メアリー
「食材は買いましたけど、持って行くか、作るかは今決めましたので」

宮澤
「……さよか」

夕食をデーニッツと一緒に食べようと言う事になったのだが……なんかツッコミを入れたいところがある……がやめておく。

コンコン

マーリン
「デーニッツ提督～、居る～？」

デーニッツ
「あ、マーリンさん？　ちょっと待って下さい」

そう言って暫くしてからドアが開いた。

デーニッツ
「あ、あの…」

マーリン・メアリー
「「失礼しま～す」」

家主を差し置いてドカドカと入る2人。
デーニッツは訳が解らず慌て、宮澤は頭を抱える。

デーニッツ
「え、あ、あ、あの、いったい…」

宮澤
「あぁ…済まん、デーニッツ。マーリーが「デーニッツが寂しいだろうから、一緒に食べよう」と言い出して…まさかこうなるとは…」

デーニッツ
「え、そ、そうなんですか？　あ、ありがとうございます…」

……どうやら、嫌では無いらしい…多分だが…。

３０分後……

マーリン・メアリーの主従コンビが作った料理がテーブルに並んでいた。

デーニッツ
「…あ、お、美味しいです…」

マーリン
「うふふ、良かった～」

メアリー
「良かったですね、お嬢様」
お風呂に入ってきたデーニッツがおかずを一口食べて、好評を得た。
その後は暫く世間話と夕食に舌鼓。
だが……

バタン！

宮澤
「な、デーニッツ！　どうした！？」

いきなりブッ倒れたデーニッツを診る宮澤……すると、ある事に気付いた。

宮澤

「…おい！　これ赤ワインじゃん！？」

マーリン
「あちゃ～、一気に飲んだから、アルコールが回っちゃったみたいね」

目を回すデーニッツとワインを見ながらマーリンが言った。

メアリー
「少し寝かせておけばいいと思いますよ」

宮澤
「やれやれ…」

ピーピー…ピーピー…

何処からか呼び出し音が響いてきた。
音のする方にあったのは……テレビ電話だった。

宮澤
「…長距離通信かな？」

マーリン
「テレビ電話だから…ドクツからかしら？」

メアリー
「…でしょうね」

3人は顔を見合わせる。

宮澤
「ま、まあ、このままってのも迷惑だしね…」
そう言いながら、テレビ電話の画面に表示された『受信』ボタンを押す。
すると……
『……ん？　おかしいな？　番号を間違えたか？』
……映ったのは…思わぬ人物だった。

暫くして……

デーニッツ
「う～～…（まだ頭の中がクルグル回ってる…）」
宮澤
「大丈夫か…デーニッツ？」
漸く目覚めたデーニッツに宮澤が訊いた。
デーニッツ
「あ、はい……あぁ！！　いま、何時ですか！？」
マーリン
「…酔いから覚めて直ぐ思い出すくらい、余程楽しみにしているみ

たいで」

『デーニッツ、何時も風呂上がりにやり取りすると思ったが…わざとだったんだな』

メアリー
「ありゃ～、そんな事があったんですね～」

マーリン・メアリー・電話の相手がデーニッツを見ながら呟く。

デーニッツ
「あ、あ、あ、あ、あ、あぁぁ！！　そ、そ、そ、総統！！！」

そう……電話の相手は現ドクツ第三帝国総統レーティア・アドルフだった。

レーティア
『いや～、デーニッツ。日本の上司から色々と聞いて面白かった。意外な一面も見れたしな…じゃあ、また今度な、デーニッツ』

デーニッツ
「あ、あ、あわわわわわ…は、はい…また今度…」

今にも白煙を出しそうなくらい顔を真っ赤にさせながら返事をした。

宮澤
「希代の天才とはあの事だな……おい、デーニッツ？」

ふと気が付くとデーニッツ目を回している。

デーニッツ
（そ、総統に恥ずかしい姿を……あ、あ、あ、あ…）

バタン！！

宮澤
「で、デーニッツ！？　しっかりしろ！？」

マーリン
「総統執着もここまでくるとある意味ビョーキね」

宮澤
「冷静に評価するな！　デーニッツ！　起きろー！！」

次号へ

29　福原&デーニッツのオリジナルイベント（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

３０　ラバウル星域攻略戦

２日後……ラバウル星域

陸奥艦橋

宮澤
「で、どうだ？」

新井
「…ダメです。ミノフ杉花粉で砲撃戦は出来ません」

ラバウル星域は昔から『ミノフ杉花粉』と呼ばれる花粉（宇宙に花粉ってありのか？）の為、ビーム系統兵器は余り使用出来ないまあ、晴れたら使える……晴れる事自体が余り無いが…。

最上
「なんで砲撃戦専門の第４艦隊の基幹部隊も参加なの？」

マーリン
「『ソロモンの魔女』ことガメリカ海軍のフリス・ハルゼー提督率いる航空部隊がいるから送られたの」

本間
「…まさか、私達は囮か的？」

宮澤
「違う違う、新型巡洋艦の試験も兼ねて」

3人
「「「……」」」

メアリー
「あ、あの……それはそれで大丈夫ですか？」

宮澤・マーリン
「「大丈夫！」」

……と言う訳で第４艦隊を含めた艦隊がラバウル星域攻略の為に来ていた。
ミノフ杉花粉が舞うこの星域では砲撃戦は不可能な為、航空攻撃・ミサイル・鉄鋼弾が主な攻撃手段となる。
この為、今回は田中、ララー、リンファ、デーニッツ、潜水艦部隊を率いる高須砂男准将の５艦隊に第４艦隊の基幹部隊が加わっての攻略戦だった。

最上
「本当に参加する必要があったのかしら？」

宮澤
「仕方ないさ。山下長官から預かった…」

新井
「レーダーに反応！　敵編隊です！」

マーリン
「フリス・ハルゼーが動いたみたいね」
落ち着いた様子で呟くマーリン。
そして、宮澤も落ち着いていた。

宮澤
「出来る限り近付けろ。さて、フリス・ハルゼーの占いがどこまで見た物か…試してみようか」

その頃……ガメリカ艦隊

士官
「さすがハルゼー提督！　提督の占い通りの座標に敵船団と護衛艦隊がいました！」

そう言って喜ぶ士官の隣でフリス・ハルゼーは微笑みながら占いを続けていた。
ハルゼー
「……不味いわね」

士官
「どうしました？」

ハルゼー
「敵船団への攻撃…失敗するわ」

士官
「え…？」

そんな…と言おうした士官の声を遮り、無線が入った。

無線
『こちら攻撃隊！　敵対空砲火は強力です！　我が方は既に半数が…ズガーン！！』

爆発音と共に途切れた攻撃隊との通信はハルゼーの占い通りである事を物語っていた。

ハルゼー
「これ以上は危険ね…全艦隊に撤退命令よ」

士官
「…わかりました」

残念そうに返事をする士官。
だが、それは少し遅かった。

ドガーン！ドガーン！

士官
「な、なんだ！？」

オペレーター
「わ、わかりません！　突然、駆逐艦と巡洋艦が被弾しました！」

被弾した駆逐艦と巡洋艦を見たハルゼーは命じた。

ハルゼー
「長居は無用よ。艦載機を収容したら急いで撤退！」士官
「はい！」

陸奥艦橋

新井
「デーニッツ提督より入電！　『敵空母艦隊襲撃。空母は取り逃がすも、諸艦艇に被害を与えり』以上です」

宮澤
「平賀博士から防空巡洋艦一個戦隊を預かっておいて良かったよ。まあ、ハルゼーが早く退いてくれて良かったけど」

マーリン
「これで安心して陸軍を降ろせるわね」

最上
「はい！　長官に意見具申！」

宮澤
「どうせ、『ラバウル星域のビーチで遊びたい！』だろう？　不許可だ」

最上
「うわ～～ん、そんな～、せっかくメアリーの着せ替えをしようと思ったのに～」

木村・新井・本間
「「「いや、しなくていいから」」」
呆れられた仲間達からツッコミを入れられた最上だった。

次号へ

３０　ラバウル星域攻略戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1625v/

大帝国　～ある青年将校の備忘録～

2011年12月18日10時54分発行